



著作遺跡 著作古墳群

—三井株式会社東海工場新設事業

日星電気株式会社袋井工場新設事業

に伴う緊急発掘調査報告書—

1990

静岡県袋井市教育委員会

例

言

1. 本書は三甲株式会社代表取締役後藤甲平（岐阜県本巣郡穂積町本田474-1） 日星電気株式会社代表取締役鈴木五一（静岡県浜名郡雄踏町宇布見4251番地）を委託者とし、袋井市長豊田舜次（静岡県袋井市新屋一丁目1番地の1）を受託者として行った若作遺跡、若作古墳群発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は袋井市教育委員会社会教育課の吉岡伸夫を調査担当者とし、昭和63年7月1日から平成元年6月30日まで実施した。
3. 当丘陵地には当初若作古墳群のみが所在すると考えられてきたが、発掘調査の結果、新たに広範に分布する弥生・古墳時代前期の集落跡・墳墓群等が発見されたため、今後これらの遺構群を古墳群と区別し、若作遺跡と呼ぶ。
4. 本書の執筆分担は次のとおりである。

第1章 第2章第1・2・3節 i~iv	第3章第2節	吉岡伸夫
第2章第3節 v	第3章第1節	松井 明
5. 本書の編集は吉岡が行った。
6. 発掘調査資料はすべて袋井市教育委員会が保管している。
7. 発掘調査および本書の発刊に係わる事務は袋井市教育委員会社会教育課文化振興係が担当した。

目 次

第1章 序 説	1
第1節 発掘調査にいたる経過	1
第2節 発掘調査の方法・経過・調査整理体制	3
第3節 周辺の遺跡分布	4
第2章 遺跡 古墳群	4
第1節 基 本 層 位	4
第2節 縄 文 時 代	4
第3節 弥生・古墳時代	7
第4節 古 墳 群	21
第5節 奈良・平安時代以降	53
第3章 総 括	54
第1節 若 作 遺 跡	54
第2節 若 作 古 墳 群	64

挿 図 目 次

第1図 若作遺跡・古墳群位置図 周辺遺跡分布図	1
第2図 若作遺跡・古墳群周辺地形図	2
第3図 若作遺跡・古墳群全体図	5
第4図 縄文土器 剥片	7
第5図 住居跡実測図(1)	8
第6図 住居跡実測図(2)	9
第7図 住居跡実測図(3)	10
第8図 住居跡実測図(4)	12
第9図 土壇 木棺墓 土器棺墓実測図	14
第10図 弥生・古墳時代前期の遺物(1)	17
第11図 弥生・古墳時代前期の遺物(2)	18
第12図 弥生・古墳時代前期の遺物(3)	19
第13図 弥生・古墳時代前期の遺物(4)	20
第14図 弥生・古墳時代前期の遺物(5)	21
第15図 弥生・古墳時代前期の遺物(6)	22
第16図 B1号墳実測図	23
第17図 B1号墳主体部実測図	24
第18図 B2号墳主体部実測図	24
第19図 B2号墳実測図	25
第20図 B3号墳実測図 主体部実測図	26
第21図 B4号墳実測図 主体部実測図	27
第22図 B5号墳実測図 主体部実測図	28

第23図	B 6号墳実測図 主体部実測図	29
第24図	B 7号墳実測図 主体部実測図	30
第25図	B 8号墳実測図 主体部実測図	31
第26図	B 9号墳実測図	32
第27図	B 9号墳主体部実測図	33
第28図	C 1号墳主体部実測図	33
第29図	C 1号墳実測図	35
第30図	C 2号墳実測図 主体部実測図	36
第31図	C 3号墳実測図	37
第32図	C 4号墳実測図 主体部実測図	38
第33図	C 5号墳実測図	39
第34図	C 5号墳主体部実測図	41
第35図	C 6号墳主体部実測図	41
第36図	C 6号墳実測図	42
第37図	C 7号墳実測図	43
第38図	C 7号墳主体部実測図	44
第39図	E 1号墳実測図	45
第40図	E 1号墳整地面実測図	47
第41図	D 2号墳実測図	49
第42図	木棺墓実測図	50
第43図	古墳出土遺物(1)	51
第44図	古墳出土遺物(2)	52
第45図	平安時代以降の陶器	53
第46図	若作遺跡弥生・古墳時代前期の集落模式図	55
第47図	B地区古墳時代前期の遺構変遷図	56
第48図	東遠江の古墳時代前半期の土器変遷図	58
第49図	遠江地方における弥生・古墳時代前期の集落盛衰変遷図	63
第50図	若作古墳群群構成模式図	67

表 目 次

第1表	若作遺跡住居跡一覧表	11
第2表	若作古墳群一覧表	65

図 版 目 次

図版1	若作遺跡・古墳群遠景 若作遺跡・古墳群B地区遠景
図版2	B地区遺構群 B 1号住居
図版3	B 4号住居 B 4号住居鉄剣・剣斧・鉋出土状況

- 图版 4 B 8 号住居 B 9 号住居
 图版 5 E 1 号住居 C 地区土坛群
 图版 6 D 地区土器棺盖出土状况 B 1・2・3 号墳分布状况
 图版 7 B 1 号墳 B 2 号墳
 图版 8 B 3 号墳 B 4 号墳
 图版 9 B 5 号墳 B 6 号墳
 图版 10 B 7 号墳 B 7 号墳主体部
 图版 11 B 8 号墳 B 9 号墳
 图版 12 C 1 号墳 C 2 号墳
 图版 13 C 3 号墳 C 4 号墳
 图版 14 C 5 号墳 C 7 号墳
 图版 15 D 1 号墳 D 1 号墳周溝内土器出土状况
 图版 16 D 2 号墳 E 1 号墳
 图版 17 遺物 (1) 遺物 (2)
 图版 18 遺物 (3)
 图版 19 遺物 (4)

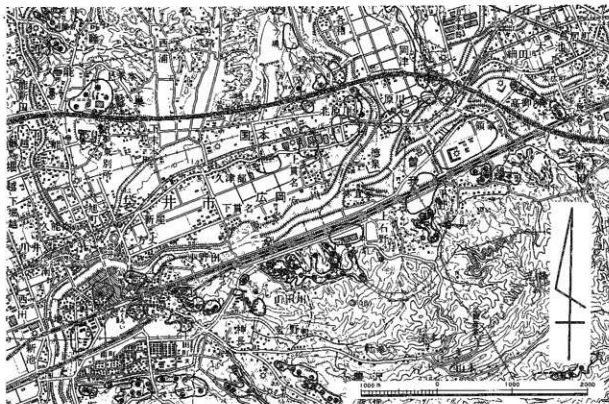
第1章 序 説

第1節 発掘調査にいたる経過

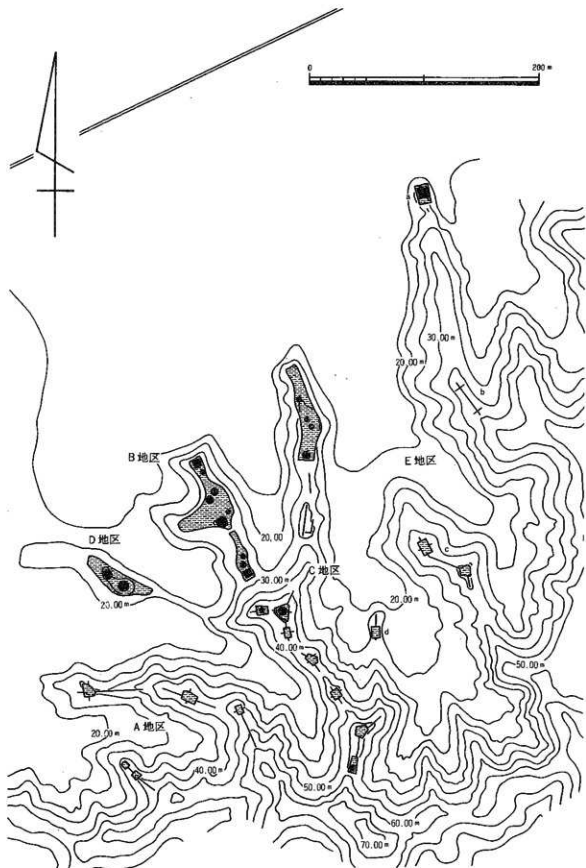
若作遺跡・若作古墳群はJR「袋井駅」の東方約4km、小笠山丘陵の北山麓に位置する。

三甲株式会社東海工場・日星電気株式会社袋井工場の新設計画に伴い、若作遺跡・若作古墳群の取り扱いが問題になったのは、昭和62年の夏である。工場新設計画域に古墳群（3基）が所在することは、「静岡県遺跡地図」（静岡県教委1979）との照合により周知されていたが、丘陵の状態から見て、さらに多くの古墳が分布していると予想された。袋井市教育委員会は11月、計画域内の遺跡分布踏査を行い、少なくとも10基の古墳が記録保存（発掘調査）の対象となる旨報告した。この分布踏査結果をもとに、三甲株式会社・日星電気株式会社と袋井市教育委員会は協議を重ね、12月9日、現状保存する古墳、発掘調査の方法、時期、経費負担等について相互に確認した。

昭和63年3月22日、三甲株式会社・日星電気株式会社から文化財保護法第57条の2第1項に係る「埋蔵文化財発掘届け」が文化庁長官あて提出された。7月1日、三甲株式会社代表取締役後藤甲平、日星電気株式会社代表取締役鈴木七一と袋井市長豊田舜次の間で若作古墳群発掘調査協定書・委託契約書が締結され、袋井市教育委員会が調査実施機関となって、消滅する遺跡・古墳群の記録保存に努めることとなった。



第1図 若作遺跡・古墳群位置図 周辺遺跡分布図



第2図 右作遺跡・古墳群周辺地形図

第2節 発掘調査の方法・経過・調査整理体制

i) 発掘調査の方法

尾根を基準に発掘調査区を大きくA～Eの5地区に分け、丘陵の尾根に沿って幅1mないし1.5mの遺構確認用トレンチを任意に設定した。古墳と思われる尾根の高まり部ではトレンチを十字に組み、またB地区の広範な緩斜面部には10m間隔で平行するトレンチを6条設けた。これらのトレンチを発掘し、遺構の残存状態を確認した後、必要な範囲を平面発掘調査した。

古墳・住居跡等はA～E地区ごと、検出された順で通し番号を付し、極力遺構ごとに遺物を取り上げることとした。B地区緩斜面部の包含層出土品については、1辺10mの方眼単位で取り上げた。

墳丘実測図・住居跡等の遺構図面は20分の1縮尺を基本とし、主体部・遺物出土状態図等は10分の1縮尺で作成した。写真撮影はブローニーサイズ原画（白黒）・35mmサイズ原画（白黒・カラーリバーサル）を併用した。遠景写真の撮影にはラジコンヘリコプターを用いた。

ii) 経 過

- 7月 発掘事務所建設 事務用品搬入
8月 道具小屋を建て、発掘資材搬入 19日C地区から遺構確認調査開始 C1～3号墳検出
9月 C地区遺構確認調査終了（C4～6号墳検出） 平面発掘調査に移行 C地区丘陵先端部において木棺墓群発掘
10月 C1～4号墳完掘 写真撮影 実測作業 A・B地区遺構確認調査開始 B1～3号墳検出
11月 C5・6号墳完掘 写真撮影 実測作業 B4～9号墳・竪穴住居群検出 平面発掘調査に移行 A地区遺構確認調査終了
12月 B地区平面発掘調査継続 B1～9号墳・木棺墓群完掘 写真撮影 実測作業 C地区平面調査中にC7号墳検出 22日ラジコンヘリコプターを使い遠景写真撮影 D・E地区遺構確認調査開始（D1・2号墳 E1号墳検出）
1月 B地区竪穴住居群完掘 写真撮影 実測作業 D1・2号墳発掘継続 E1号墳完掘
2月 D1・2号墳 D1号住居完掘 D・E地区写真撮影 実測作業 B地区斜面堆積土を発掘後片づけ 発掘資材を文化財資料室へ運び、23日現地作業のすべてを終了した。

iii) 調査整理体制

発掘調査計画機関 日星電気株式会社

三甲株式会社

発掘調査実施機関 袋井市教育委員会

教 育 長 鈴 木 勲 一（昭和63年12月まで）

浅 井 通 男

社会教育課長 井 口 育 夫（平成元年3月まで）

岩 崎 保

文化振興係長 小 粥 保 夫

主任学芸員 占 岡 伸 夫（発掘担当者）

永 井 義 博

学 芸 員 松 井 一 明

主 事 建 部 千 代 子

現地発掘調査 調査補助員 早川保子 発掘作業員 高橋秋義 三浦久雄 山崎

莊一 海野昭平 岩崎良男 加藤博司 諸井栄 寺田矩江 高橋
巳代子 早川里美 松田和子 太田みか 名倉保子 伊藤みさ
寺田松枝 高橋さか江 永田のお枝 安間しげ子 樽松光子 仲
根世始子 山本はつ江 資料整理員 鈴木寿美子

資料整理 調査補助員 早川保子 寺田矩江 山本はつ江

第3節 周辺の遺跡分布

小笠山丘陵の北麓に面した逆川・原野谷川左岸流域の沖積地では、総じて自然堤防は未発達であり、弥生時代から古墳時代前期におよぶ集落遺跡は主に丘陵裾の微高地や北向きの緩傾斜地に立地している（愛野向山Ⅰ・Ⅱ遺跡 上石野遺跡）。また沖積地に向かって張り出す舌状丘陵の尾根上には小規模な竪穴住居群、方形周溝墓群が点在する（愛野向山Ⅲ・Ⅳ遺跡 上石野1号墓）。愛野向山Ⅰ遺跡からはかつて大量の木製品が出土したと伝えられ、150棟余の竪穴住居・掘立柱建物群をはじめ、20数基の方形周溝墓群が検出された愛野向山Ⅱ遺跡は、当左岸流域における弥生時代後期・古墳時代前期の中核的集落である。愛野向山Ⅱ遺跡に隣接する愛野向山Ⅲ遺跡からは、弥生時代後期の木棺墓群に伴って舌付き小銅鐸が出土し話題となった。

縄文時代以前の遺跡は顕著でないが、愛野向山Ⅱ遺跡や愛野向山A4号墳の盛土から黒曜石剥片・貞岩石鏃・中期後半の縄文土器片等が若干出土している。

西方に続く丘陵地は5世紀後半から6世紀前半にかけて形成された愛野向山古墳群（60余基）および横穴群（20数基）の分布域であり、若作古墳群を挟んで東方の丘陵地は、中遠地方有数の高御所大横穴地帯となる。これらの古墳群と重複して中・近世墳墓群（愛野向山墳墓群）が営まれている。

第2章 遺跡 古墳群

第1節 基本層位

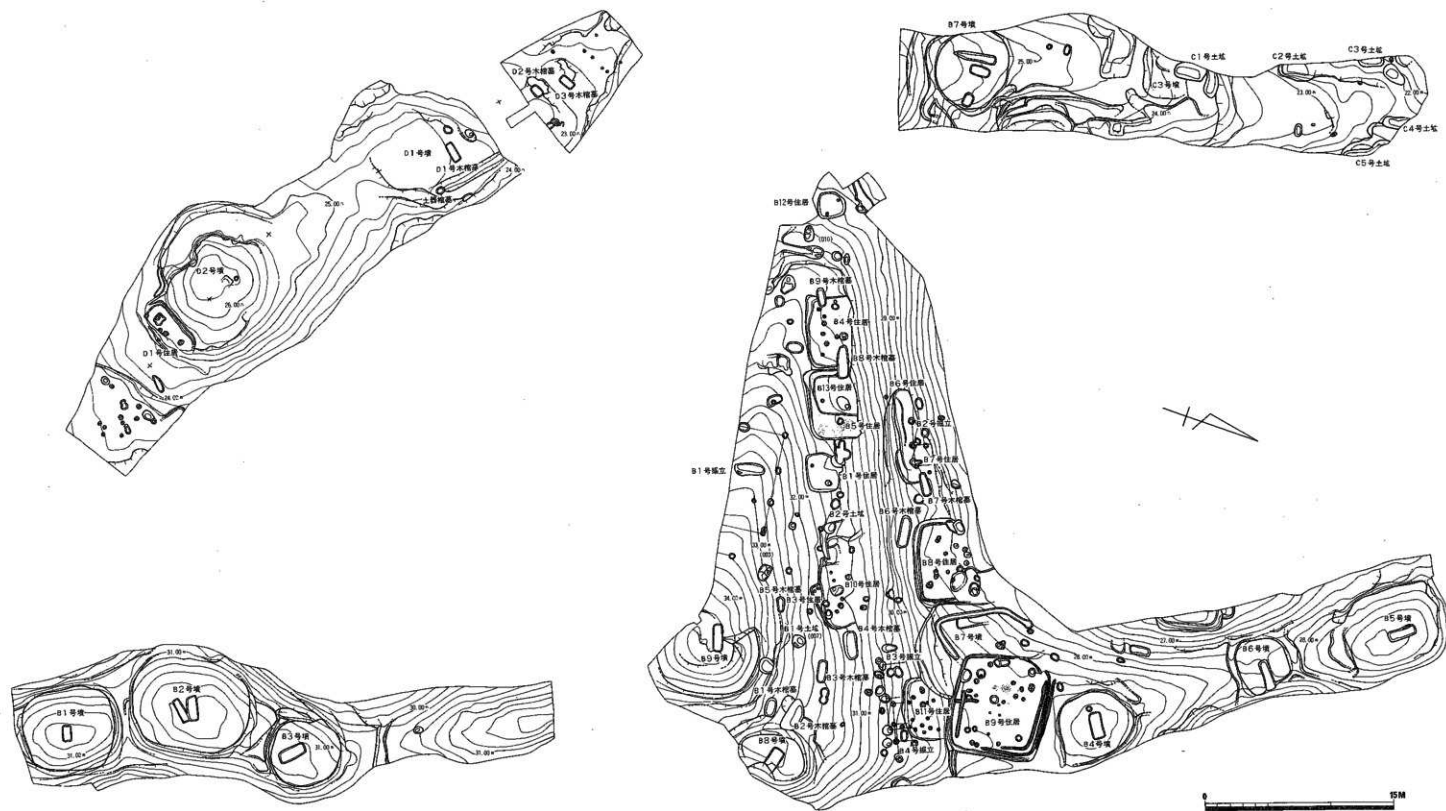
A～E地区とも、丘陵尾根の頂部では薄い表土を除去すると基盤層である小笠山礫層が露出する。C地区先端近くの基盤層は一部暗灰色砂質粘土および黄褐色砂質土となる。古墳の周溝・主体部等はこの基盤層を掘り込み、周溝内には主に黒色有機質土・暗褐色砂礫混じり土が、主体部内には暗褐色土が堆積していた。木棺墓の掘り方内には黒色有機質土が落ち込んでいるものがある。

B地区丘陵の下位の北斜面およびD地区先端部では表上下に赤味を帯びた暗褐色土（層厚30～40cm）が認められ、弥生時代後期から古墳時代後期にいたる遺物を含んでいる。竪穴住居・柱穴・土坑・竪穴状遺構の多くは、この暗褐色土を主体的な覆土とし、B4・5・9号住居およびD1号住居等では覆土上層にレンズ状をなす黒色有機質土が認められた。遺物包含層と考えられる赤味を帯びた暗褐色土は丘陵斜面の下位に向かい厚さを増し、縄文土器・灰釉陶器片等が混在している。斜面下位の堆積土はかなり攪拌されているものと思われる。

第2節 縄文時代

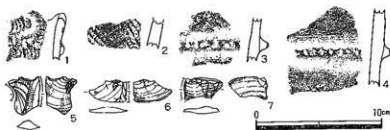
縄文時代の遺構は検出されていないが、B地区北側の丘陵斜面に堆積した暗褐色土層とD地区丘陵の先端部近くから、縄文土器片4点と黒曜石剥片3点、砂岩剥片1点（第4図）を採集した。

1は暗褐色を呈する薄手の破片で、胎土中に多量の長石・石英粒を含んでいる。山形口縁をなし、



第3圖 若作遺跡・古墳群全体圖

隆帯上に連続爪形文を施す。五領ケ台式土器の新しい時期に属するものであろう。縄文および隆帯上に刻みを加えた他の3点も縄文時代中期後半に比定可能な土器片である。剥片の内1点には使用痕が認められ、D地区の出土剥片(5・6)の透明度は高い。



第4図 縄文土器 剥片

1～4・7 B地区出土 5・6 D地区出土

第3節 弥生・古墳時代

1) B地区の遺構群

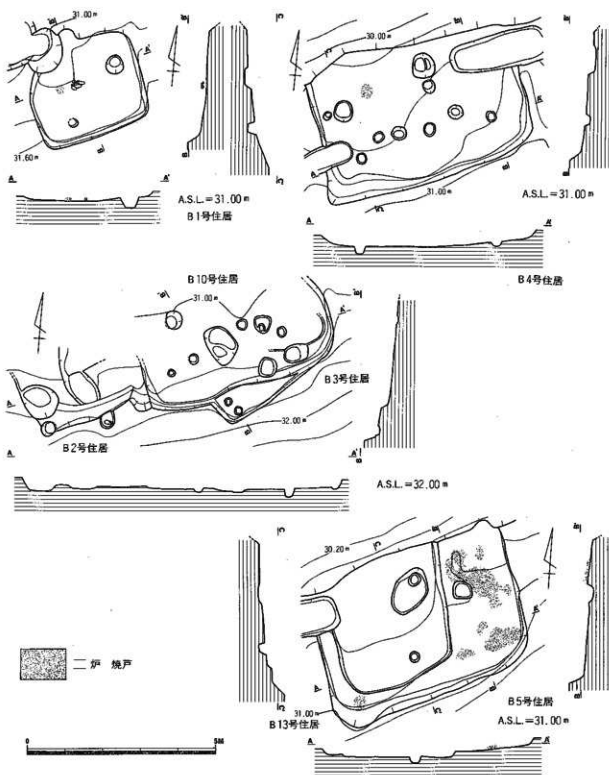
B地区で検出された遺構には堅穴住居13棟、掘立柱建物4棟以上、集石土坑2ヶ所、溝、多くの堅穴状遺構がある。

堅穴住居は北向きの丘陵斜面に立地し、後世の土砂の流失により大半が床面北半を失っている。B8・9号住居を除き壁溝が認められないのは、床面が明確でなく、基盤層を掘り込んだ堅穴住居のいわゆる掘り方底面において柱穴・壁溝等を検出したために起った欠落であり、当初床面の周縁には壁溝がめぐっていたと見るのが自然であろう。床面積は約9～66㎡とその規模には大小差が見られる。平面形は隅丸方形と呈し、大小の別なく4主柱構造を基本とする。堅穴住居の建築に際して、丘陵斜面を平坦に造り出す基盤の整形は顕著でなく、斜面に沿って上下2列、東西方向に直線状に伸びる住居群を形成していた。

斜面上位の住居群は1辺5.3～5.5mを測る3棟(B4・5・10号住居)と1辺3m強の小形住居2棟(B1・13号住居)および法量不明の2棟(B2・3号住居)の計7棟からなる、最大3棟の重複(B2・3・10号住居)が認められ、残存する床面一面に炭化物混じりの焼土(厚さ約10cm)が広がったB5号住居(焼失家屋)を切断して、B13号住居が建てられていた。その建築位置から見て、B4・5号住居および小形のB13・1号住居はそれぞれ対になると考えられ、B4・13号住居は後出的と言える。斜面上位の住居群の西端に離れて位置するB12号住居は平面不定形をなし、1辺約2mと著しく小さい。柱穴は明瞭でなく、堅穴内に確の集積が見られる等、堅穴住居とするのは早計かもしれない。

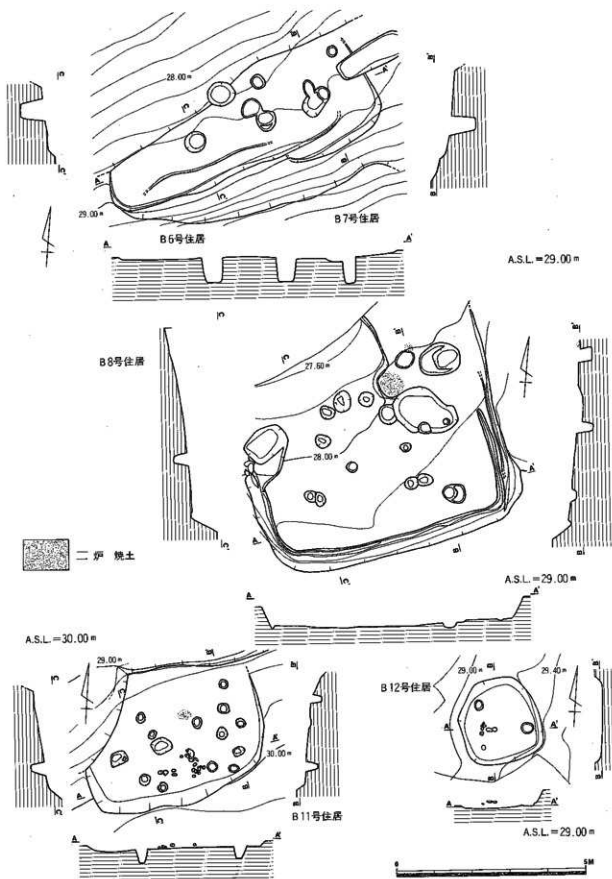
斜面下位の住居群は1辺7～8mを測る大形住居(B8・9号住居)2棟と1辺5～6mを測る2棟(B6・11号住居)、1辺3m弱の小形住居1棟(B7号住居)計5棟からなる、B6号住居は掘立柱建物(B2号掘立)に伴う丘陵斜面の整形痕を堅穴と誤認した可能性もある。B11号住居を切断して建てられていたB9号住居は、B地区堅穴住居群のなかで最大規模を有する。柱間は約4.5mと長大であるが、4主柱構造と思われる。壁溝が3条認められ、少なくとも2度以上の建て直しが行われたと推定でき、比較的長期間存続した堅穴住居である。西に偏して3基以上の地床炉が築かれ、北東・北面隅から一部トンネル状を呈する排水溝が丘陵斜面に向かい伸びていた。

B1・11号住居の床面中央には焼礫を含むこぶし大礫の集積が認められ、B8～10・13号住居には1ヶ所ないし数ヶ所の貯蔵穴様の落ち込みが見られる。堅穴住居に伴った土器量は決して多くないが、B1号住居の南東隅から瓢壺・付付甕・高杯3点が一括出土し、B9号住居の南西隅にも多量の土器片が集積していた。その器種組成に占める小形高杯の保有率は異状に高く、比較的長期間存続した大形住居である点とあわせ、B9号住居の性格・機能を考えるうえで興味深い現象である。出土土器の

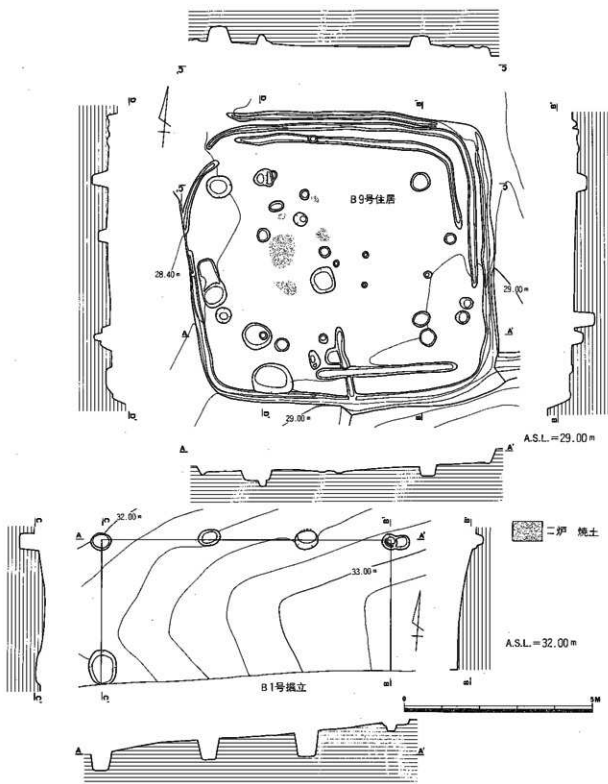


第5図 住居跡実測図(1)

大半は古墳時代前期中頃の古式土師器1型式の範疇に納まるものであるが、B12号住居の出土土器は邇なものと思われる。B3号住居から鉄剣を思わせる鉄片(第15図209)が1点、B4号住居から鉄剣・鉄斧・鉋(第15図210~212)が3点一括して出土し、B9号住居から伸びる排水溝内には 鍬(第



第6図 住居跡実測図(2)



第7図 住居跡実測図(3)

15図(213)が1点落ち込んでいた。B4号住居の鉄製品は掘り方の底面から約14~30cm浮いていたが、住居中央にレンズ状をなして堆積する覆土最上層(黒色有機質土)に被われた砂礫混じりの暗褐色土

第1表 若作遺跡住居跡一覧表

住居跡 番 号	平面形	法		量 深 さ	柱穴数	壁溝の 有 無	炉 跡	時 期	備 考
		東西辺	南北辺						
B-1	隅丸方形	3.05	2.60	0.35	2	無	有	Ⅱ 期	
2	隅丸方形	(3.20)	(1.80)	0.35	2	無	無	Ⅱ 期 ?	B10号住居に切断される
3	隅丸方形	(2.50)	(0.90)	0.45	2	無	無	Ⅱ 期 ?	B10号住居に切断される
4	隅丸方形	5.50	(3.90)	0.30	10	無	有	Ⅲ 期	
5	隅丸方形	5.45	(4.00)	0.40	1	無	有	Ⅱ 期	B13号住居に切断される 掘立柱建物に伴う崩り込みか？
6	隅丸方形	6.45	(2.55)	0.50	2	有(?)	無	?	B7号住居と重複 B2号掘立に切断 される
7	隅丸方形	2.90	(2.70)	0.25	2	無	無	?	B6号住居と重複 B2号掘立に切断 される
8	隅丸方形	6.90	(5.90)	0.60	15	有(2)	有	Ⅱ 期	土坑
9	隅丸方形	8.20	8.05	0.60	19	有(3)	有(3)	Ⅲ 期	排水溝 土坑 B11号住居を切断する
10	隅丸方形	5.25	(2.10)	0.65	8	無	無	Ⅱ 期	B2・3号住居を切断する
11	隅丸方形	4.90	(3.70)	0.25	14	無	有	Ⅱ 期	B9号住居 B3・4号掘立に切断さ れる
12	不 定 形	2.10	2.25	0.40	2	無	無	I 期	
13	隅丸方形	3.15	(3.35)	0.35	2	無	無	Ⅲ 期	B5号住居を切断する
D-1	隅丸方形	5.10	(2.45)	0.30	6	無	無	古 期 ?	
E-1	隅丸方形	4.90	4.40	0.45	5	無	有	古 期 後 半	

層中に含まれており、住居廃棄時のものとは断定できないものの、B4号住居に伴う遺物であることは明らかである。

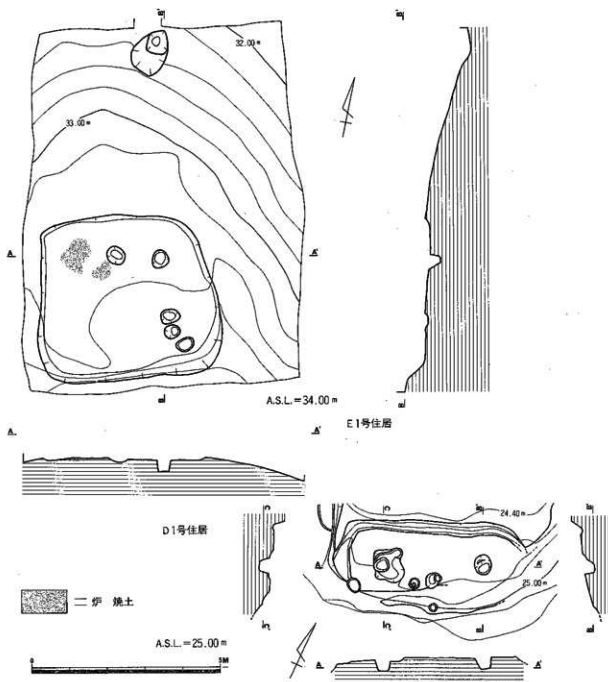
掘立柱建物は3地点に別れ分布している。B1号掘立を除き、竪穴住居同様丘陵斜面の崩落により北面の柱穴列は失われている。桁行方位は斜面に平行してほぼ東西を呈し、多くが梁間1間の建物であったと推定される。柱穴掘り方は平面円・楕円形(30~75cm×40~90cm)をなし、竪穴住居の柱穴に比べ深く(40~65cm)大きい。暗褐色土を主体的な覆土とする。

尾根頂部に位置するB1号掘立は桁行3間(7.6m)を測り大規模である。B2号掘立(桁行2間=3.6m)は丘陵斜面を削り込み整形された平坦面に建てられ、B6・7号住居を切断している。B9号住居の南側にはB11号住居を壊して、少なくとも重複する2棟(B3・4号掘立)以上の掘立柱建物が建てられていたと考えられる。両建物とも桁行2間(3.0m×5.2m)を呈する。

集石土坑(B1・2号土坑)は尾根の頂部近くに分布する。平面楕円形(B1号土坑=1.0m×1.15m 深さ20cm B2号土坑=75cm×90cm 深さ30cm)、断面は浅いすり鉢状を呈する。暗褐色土を覆土とし、底面中央に焼礫を含むこぶし大礫と土器片が集積していた。出土土器はB1・9号住居出土品とほぼ並行する時期のものである。

他にB4号住居の西方で尾根と直交する溝(010)がある。また西に向かって伸びる尾根の頂部を中心に、平面楕円・不定形、断面すり鉢状をなす竪穴状遺構や柱穴状の竪穴が分布している。

B地区の遺構群は古墳時代前期の集落構成をよく示していると思われる。出土土器で見ると、12号住居は遅ると判断されるが、同一の土器型式内に納まる他の遺構群もその切断関係から2時期に区分可能である。大形のB8号住居とB9号住居の排水溝が近すぎる点を考慮し、両住居に新旧差があるとすれば、小形のB1号住居とB5号住居、B9号住居に切断されるB11号住居および大形のB8号住居、B2号掘立が先行併存し、遅れてB13・4・10号住居と最大規模を有するB9号住居、B



第8図 住居跡実測図(4)

3・4号掘立が成立したと見て大過ないと思われる。B1号掘立が新旧どちらの建物群に伴うものか、また当集落の基域についても明らかにしないが、近接する小形・中規模の竪穴住居2棟、わずかに離れて建つ中規模竪穴住居1棟、加えて斜面下位に建てられた大形竪穴住居1棟と数棟の掘立柱建物という基本的な集落構成は踏襲されていたことになろう。B地区古墳時代前期の遺構群については、第3章第1節においてさらに詳述する。

またB5・8号住居と重複して、中期後半の弥生土器が伴った柱穴を検出しており、B地区においても弥生時代にすでに竪穴住居群が営まれていた可能性を付記しておく。

ii) C地区の遺構群

C地区において検出された遺構には土壌状堅穴5基がある。

土壌状堅穴は一見丘陵先端部の尾根と斜面の境に円環状をなして分布しているが、尾根頂部は後世の攪乱によりかなり削平されており、屋根上にも同様の堅穴が存在していた可能性がある。平面長方形様ないし不定形(1.9~2.8m×1.3m 深さ15~65cm)をなし、先端部斜面に位置するものも含め長軸方位はほぼ南北を呈する。覆土(暗褐色砂礫混じり土)に顕著な差は見られないが、断面がすり鉢状をなさず、底面の輪郭が長方形となるC1・2号土壌には木棺が納められていたものと推定される。明確に土壌状堅穴に伴った遺物は無い。周辺から丸子式段階に比定される弥生土器片(第13図151~153)と扁平片刃石斧(第15図206)が1点出土しており、弥生時代中期中葉に形成された土壌群と考えている。

他に丘陵先端部から古墳時代前~中期に比定可能な壙1個体(第44図48)を出土した平面楕円形の堅穴1基、土壌状堅穴から南へ約20m離れて、東斜面を階段状に削り出した整形痕が検出されている。

iii) D地区の遺構群

D地区において検出された遺構には、堅穴住居1棟、土器棺墓1基、木棺墓3基、溝、数多くの柱穴がある。

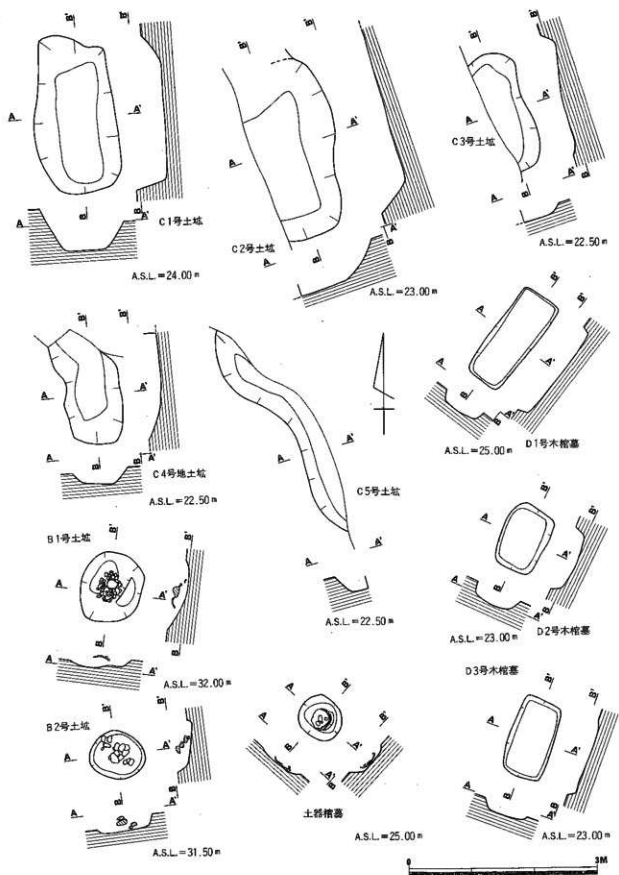
堅穴住居(D1号住居)は尾根の先端部からかなり離れて建てられている。D2号墳の周溝の掘削により大半を失っていたが、平面隅丸方形(東西幅5.10m)、4主柱構造と思われる、壁溝を持つ。覆土(黒色有機質土 暗褐色土)と古墳周溝内の堆積土との識別は困難であったが、D2号墳の盛土中に比較的多くの弥生時代後期および古墳時代前期の土器片が含まれていた。土器棺墓は丘陵先端部近くの東斜面に沿って伸びる直線状の溝(幅約1m 深さ約65cm)南端の底面に築かれていた。胴部上半を欠く壺型土器(第13図161)に高杯の杯部(第13図160)のみで蓋をしている。弥生時代後期前半に属するものであろう。溝は断面U字状を呈する。D1号墳の西側周溝とは異なる暗褐色土を覆土としており、方形周溝墓の一部であった可能性が高い。木棺墓は3基近接し、長軸方位(北東~南西)をほぼ同じくして築かれていた。底面は平坦となり小口板等の痕跡は明瞭でない。基盤層を掘り込んだ掘り方の平面形は整った長方形(1.05~1.65m×65~75cm 深さ15~25cm)をなし、暗褐色土を覆土とする。D1号木棺墓は先述した方形周溝墓の主体部とも考えられる。D2号木棺墓の覆土には後期の弥生土器片と古式土師器片が共に含まれていた。柱穴(径25~30cm 深さ15~40cm)は10数ヶ所を数え、D1号住居の南側に分布している。重複して平面楕円形(径0.5~1.1m 深さ約30cm)をなす土坑も3ヶ所認められ、内一つには、古墳時代前期の壺型土器(第13図192)が落ち込んでいた。規則的な並び方を示さないが、おそらく堅穴住居の柱穴のみが残存したと思われる。遺構に伴った遺物は少ないが、D1・2号墳の盛土中には弥生時代中期から古墳時代前期にいたる土器片および砥石・石斧等(第15図207・208)の石器が含まれていた。

D地区は弥生時代の後期前半、B地区の住居群に対応する墓地であったと考えられ、降って古墳時代前期になると数棟の堅穴住居群が営まれるようになったと判断される。

iv) E地区の遺構群

E地区で検出された遺構は堅穴住居1棟、土坑3ヶ所のみである。

堅穴住居(E1号住居)はE地区で丘陵の先端部に1棟単独で建てられている。北面が狭まるものの平面形は隅丸方形に近い。柱穴(径20~25cm 深さ約15cm)は総じて浅く、西側を欠くが、4主柱構造と思われる。北西隅に2ヶ所焼土が認められ、黒色有機質土・暗褐色砂礫混じり土を覆土とする。



第9图 土坑 木棺墓 土器棺墓平面图

比較的まとまった後期後半の弥生土器片が伴っていた。

土坑は平面楕円形ないし不定形(1.25~2.2m×0.9~1.7m)で、断面は浅い(10~20cm)すり鉢状をなし、E1号住居北側と南側の丘陵尾根の高所頂部に分布している。高所(標高約65m)に位置するE3号土坑はE1号住居と併存していた可能性が高い。

他に、E d地区でも完形に近い弥生時代後期後半の高杯などが出土しているが、明確な遺構は認められなかった。しかし、土器量は豊富であるため住居跡などの遺構があった可能性が高い。

v) B~E地区出土の遺物

今回の調査で出土した弥生時代~古墳時代前期の遺物は、弥生時代中期、後期、古墳時代前期に分けられる。また、土器のほか石器や鉄器なども出土している。以下時代別に記述していく。

弥生時代中期の遺物

中期の遺物はB5号住居、B8号住居、C地区、D地区という広範囲から微量の土器が出土している。中期前半の丸子式と思われる第13図151の壺型土器、丸子式新段階になるとと思われる細頸壺の第13図152と甕型土器の第13図194がある。第13図153の条痕の施された壺型土器と思われる小破片も丸子式と思われる。

中期後半の白岩式と思われるものとしては、内面に低い凸帯状の張り出しのある高杯の第10図9、受口状口縁の細頸壺の第10図24、同じく細頸壺の第13図158・193、大きく口縁が外に開く甕型土器の第13図157がある。第13図156のあげ底の壺も中期後半の白岩式としてもよいものだろう。

石器については第15図205と206の扁平片刃石斧が出土している。第15図207の石斧は側面に明確な面を持たない丸みがあり刃部も蛤刃に近い形態で、扁平片刃石斧としてもよいものか疑問である。刃部には線条痕が観察でき、蛤刃石斧と似たような使い方をされたものかも知れない。石材は205・207が変成岩系のもので、206は大井川水系によく見られるあずき色の堆積岩(暗紫赤色輝緑凝灰岩)である。遺構内出土のものが少ないので明確な時期は判らないが、中期後半の土器が出土している地区から出土しているので中期後半に属する可能性が高いだろう。

弥生時代後期の遺物

後期の遺物はE地区を中心としてC地区、D地区で出土している。

後期前半の土器としては鐙状口縁の高杯と、横羽状の刷毛目による文様が施された壺型土器の組み合わせになる土器棺の第13図160と161がある。

後期後半の土器は菊川式の新段階で、E地区出土の胴部下半が大きく曲折して張る第14図197、折り返し口縁の鐙状口縁高杯の第14図204、甕型土器の第14図203がある。ほかに、C地区で羽状刺突文と縄文が施文された第13図154、鐙状口縁の高杯破片の第13図159がある。D地区の第13図162・179・181などの折り返し口縁の壺型土器も後期後半のものの可能性があるが、小破片のため古墳時代前期のもの(壺A類)に含まれる可能性もある。

古墳時代前期の遺物

B地区とD地区で多くの資料が得られた。本報告ではまとめて各器種ごとに分類を試みる。

壺型土器

在地系と思われる折り返し口縁の第10図6・33、第12図134を壺A類とした。第10図44は折り返し口縁の壺で円形浮文がつき、44の円形浮文と櫛描文が施文された第10図45と同一個体であると考えられた。この壺は、西遠江の弥生時代後期後半の欠山式の可能性もあるが、今回の報告では西遠江系の古墳時代前期の土器になる可能性を指摘する。第10図22・32の壺型土器は幅広の折り返し口縁で、菊川式の折り返し口縁壺の系譜を引くものと考えられ、壺B類とした。口縁部形態は判らないが、菊川式の

系譜を引く縄文の施された第11図50、第12図123の壺型土器がある。50は壺A類の折り返し口縁壺肩部になると思われ、菊川式新段階のものと区別はつけにくい。123は胴部が丸味を帯びているので菊川式からは型式変化をしており、単純口縁の壺と思われる。

つぎに外来系の壺を分類する。口唇部を肥厚させ面を作りそこに施文する第10図34・35・41、第13図163を壺C類とする。さらに34・35・163のように口唇部の面を明確に作り出すものをC1類とし、41のように面が狭いものをC2類とした。34・35・163は口唇部と内面に羽状刻突文が施されており、第11図48や49の櫛描文（波状文と横線文）の肩部文様がつくと思われた。41は口唇部の面と内面に櫛描文が施されており、第10図42・43が同一個体で櫛描文（波状文と横線文、下端に列点文）が施文されている。口縁部が大きく外反した複合口縁の第10図36・37を壺D類とした。37は口縁の曲折部に列点文が施され、第10図38～40が同一個体になると思われ櫛描文（波状文と横線文、下端に列点文）が施文されている。他に、櫛描文が施された小形の壺である第10図46がある。第10図23の口唇部を摘み上げたような小さな受口壺を壺E類とした。第10図1の口縁が内彎したいわゆる瓢壺のものを壺F類とした。単純口縁の壺のうち口縁部が外反した大形の広口無頸壺の第11図51・52を壺G類、同じく広口壺で下膨れの胴部になる第13図183と184を壺H類とした。壺G類は壺B類の口縁部と類似するが、すすの付着するものが無いこと、みがき調整が施されていることから壺型土器とした。口唇部が鋭く外反する複合口縁の第10図10を壺I類とした。沈線文が施文されている大形の壺型土器である第11図54を壺J類としたが、全体形は判らない。他に注目されるものとして、第11図55の下膨れの胴部の壺の底部に焼成後の穿孔がなされているものがある。

高杯 鉢型土器 小形器台

高杯、小形鉢型土器、小形器台はいずれも外来系のものである。

全体形が判るものが得られなかったが、第10図8のように直線的に開いた脚部で、杯部は第12図119のように大きく開いた口縁部で脚部との接合部の近くに小さな屈曲がある形態のものを高杯A類とした。杯部が半円形で、脚部が大きく開く第10図2と3、第11図72～77を高杯B類とした。全体形は判らなかったが、口縁部が外反した小さな半円形の杯部になると思われ、短い脚部になる第12図120、第13図170・173を小形高杯A類とした。他に第11図83のように口縁部が外反する高杯らしい破片があるが全体形は判らなかった。

鉢型土器は口縁部と胴部が曲折する第11図71を鉢A類とした。在来系の土器であろう。

杯部が小さく外反する小形鉢型土器である第11図64・65、第13図180を小形鉢A類とした。第11図66～69、第12図135などの底部は小形鉢A類の底と思われる。ほかに、小形鉢になるかどうか判らないが、祭祀用の小形土器になる第10図25、第11図70がある。

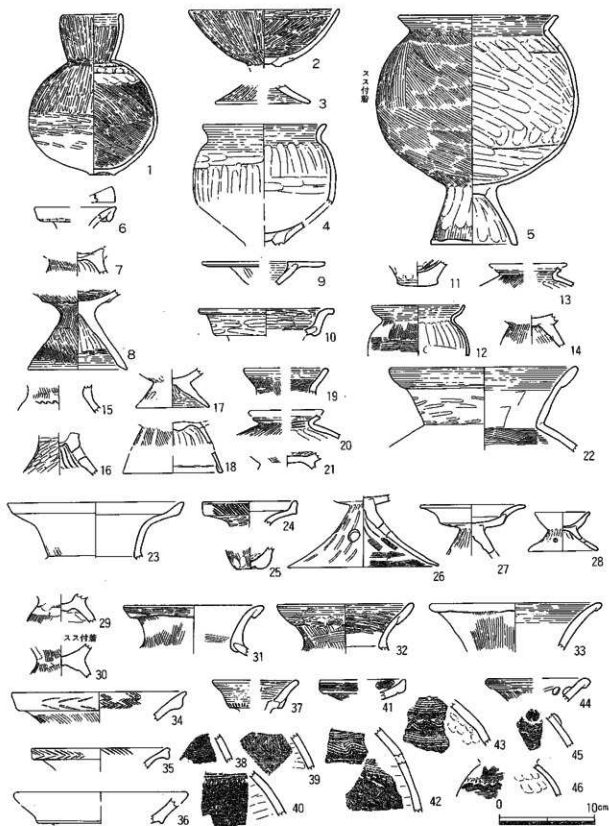
小形器台は数少なかったが、口縁が複合口縁状になる杯部の第10図27を小形器台A類、内彎しながら開く口縁の杯部になる第13図172を小形器台B類、外反した口縁部の杯部になる第10図28を小形器台C類とした。

壺型土器

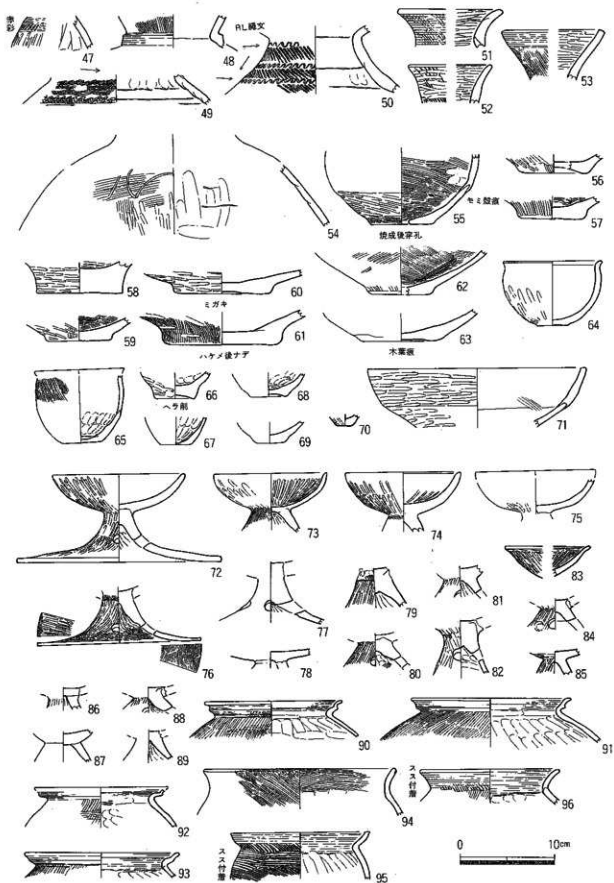
壺型土器は台付壺と台の付かない壺に分けられた。

台付壺は在地系の刻み目のある第11図94、第13図196を台付壺A類とした。台付壺A類は弥生時代のものと比べると口縁部の屈曲が緩やかになり、端部の面も弱く作り出すか、なかには丸く仕上げるために口唇部になで調整が施されるようになるものも出現する。

外来系では無刻み目の外反するなどで調整で、口唇部は丸く作る口縁の台付壺である第10図5・19、第11図96、第12図97・99・102・122・149・150、第13図176・177・188・196を台付壺B類とした。

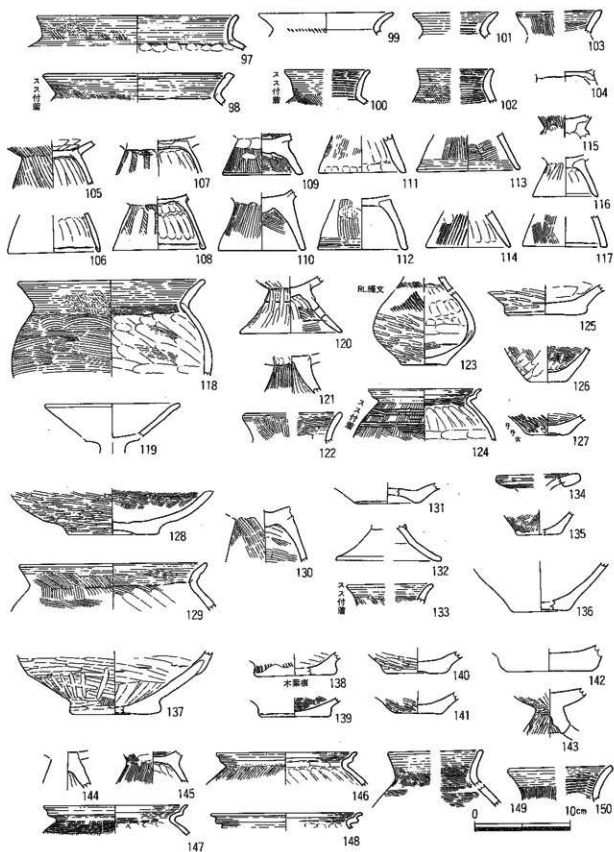


第10図 弥生・古墳時代前期の遺物（1）



第11図 弥生・古墳時代前期の遺物（2）

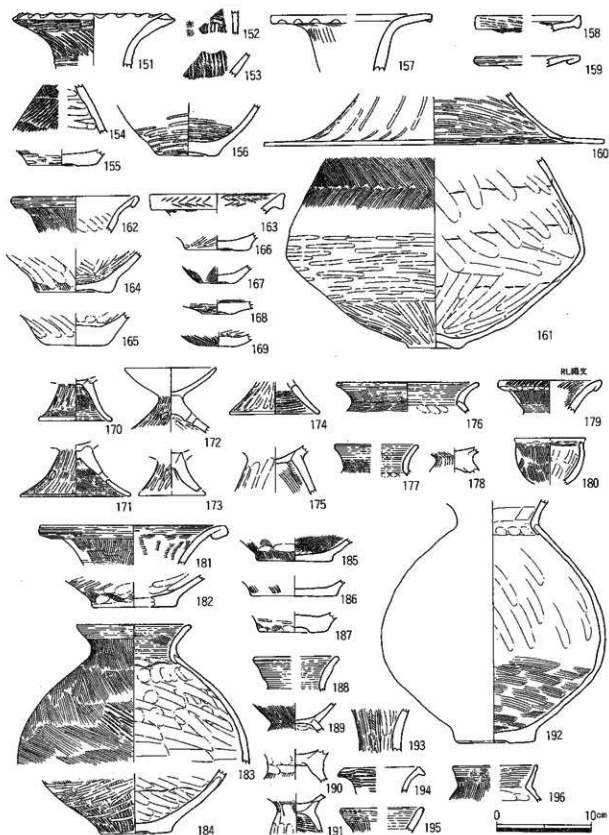
47～96B 9号住居



第12図 弥生・古墳時代前期の遺物（3）

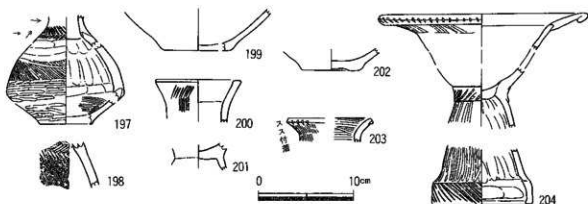
97~117B9号住居 118·119B9号住居西侧排水溝 120~122B10号住居 123~127B12号住居

128~130 B 007土坑 131~133 B 017土坑 134~150包含層・試掘トレンチ



第13図 弥生・古墳時代前期の遺物（4）

151～155・159C地区包含層・試掘トレンチ 156・157C 2号墳盛土 158C009土坑 160・161D地区土器棺 162～178D 1号墳盛土・裾 179～191D 2号墳盛土・裾 192D地区P 6 193～196D地区包含層・試掘トレンチ



第14図 弥生・古墳時代前期の遺物（5）

197～202 E c 1 号住居 203・204 E d 地区

台付甕B類は口縁の外反度や、くの字状に屈曲するかしないかでいくつか細分できそうであるが、細片資料が多いために細分しなかった。ほかに、外来系の単純口縁の台付甕の口唇部に面を作り内彎する口縁の第11図95を台付甕C類、口唇部に面を作りくの字状に開く口縁の第12図98・103を台付甕D類とした。いわゆるS字口縁の台付甕を台付甕E類とし、口縁の直立度が高く肩部に2段に刷毛目横線文を入れる第12図124・147を台付甕E1類、口縁の直立度がやや低くなり肩部の刷毛目横線文が省略されるものを含むようになる第10図13・20、第11図90～93、第12図146・148を台付甕E2類とした。なお、台付甕E1類の口縁内面に刷毛目調整が施されているが、台付甕E2類のなかにも施されるものがある。

このほか外来系の台付甕以外に、第10図12の口縁が内彎する薄手の小形甕を甕A類、第12図127の小さなあげ底の叩き甕を甕B類とした。

鉄器・石器

鉄器はいずれもB地区の出土で、古墳時代前期のものとはいえ、武器（剣・鐙）と工具（斧・鉋）、農具（鎌）がある。剣は第15図212の関をもつものと、第15図209・215のように関を明瞭に作り出さないものがある。212は全長33.5cmの短剣で、柄は8cmを測る比較的長い型式のものである。柄には目釘穴があり、木製の目釘の痕跡が残存し、刀身には柾目が奇麗に観察できる木材痕があり（針葉樹か？）鞘に納められていたことが判った。ほかに武器は第15図214の定角式の鉄鐙がある。

鉋は第15図210の関があり柄の部分に目釘穴があるやや大形のもの、第15図213のように関がないものの2種類がある。213は刃部は擦り減っていることからよく使い込まれていることが判った。第15図211は鍛造の袋状鉄斧で、刃部は擦り減っていることからよく使い込まれていることが判った。

第15図216は先端が欠損するものの幅2.4cmを測る直刃の鎌であろう。柄を装着するであろう折り返しは上端部のみであり、刃部と柄の着装角度は120°を測る鈍角のものである。

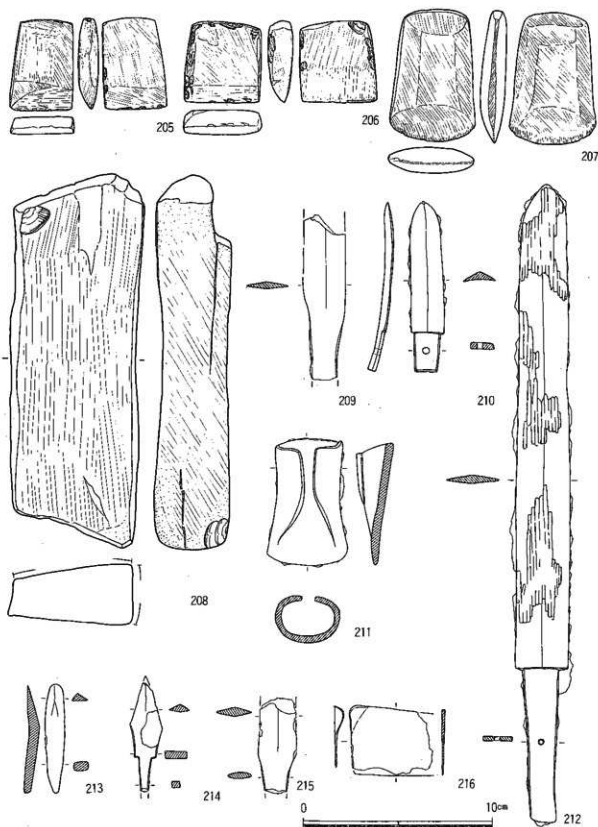
第15図208は大形の砥石で、よく使い込まれており磨面は平坦で鉄器用のものと思われる。

第4節 古 墳 群

1) 古 墳

B 1 号墳

墳丘・外郭施設 東西幅7.4m×南北幅8.4m 高さ1.7m 平面胴張長方形をなす。丘陵斜面を削り込み、尾根上に直交する溝（幅1.65m 深さ70cm）を掘削して、墳丘を区画している。基盤層の



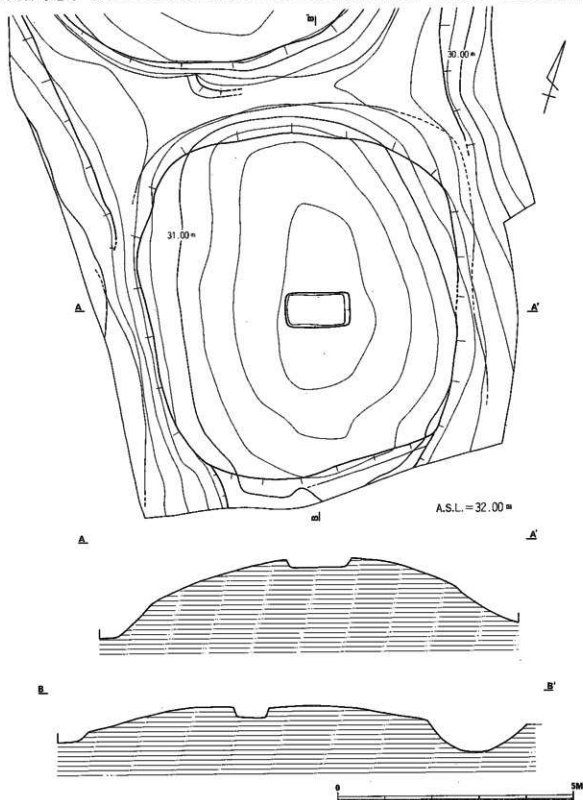
第15図 弥生・古墳時代前期の遺物（6）

205 B 8 号住居（B 7 号墳盛土） 206 C 地区試掘トレンチ 207 D 2 号墳盛土 208 D 1 号住居
 209 B 3 号住居 210～212 B 4 号住居 213 B 9 号住居西側排水溝 214 B 9 号住居（B 7 号墳
 盛土） 215・216 B 地区西端包含層

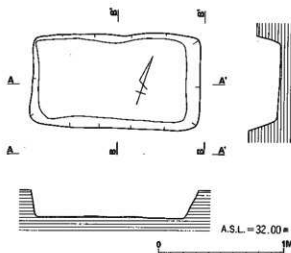
上に若干の盛土（黄褐色砂）が認められた。

主体部 木棺直葬 主軸方位N-75°-E 掘り方は平面長方形（1.35m×0.75m 深さ25cm）をなす。底面は平坦となり、箱式木棺を納めていたものと思われる。

副葬品等遺物 副葬品は無い。表土を除去したところ、墳頂部径約1.5mの範囲内に須恵器無蓋高



第16図 B 1 号墳実測図

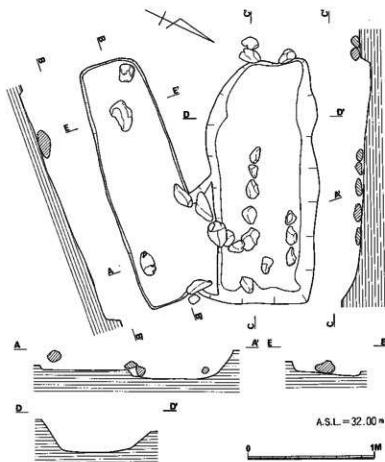


第17図 B1号墳主体部実測図

根頂部近くに墳丘の突出部がある。

主体部 新旧関係は明瞭でないが、木棺直葬と思われる主体部が2基検出された。

北側の主体部は主軸方位N-64°-E 掘り方は基盤層を掘り込み、南西隅がわずかに窪むものの、平面長方形(1.95m×0.9m 深さ25cm)を呈する。平坦な底面に密着し、径15cm前後の礫を並べた



第18図 B2号墳主体部実測図

杯(第43図1)の破片が散乱していた。杯部に2条、脚端部近くに1条、断面三角形様の凸帯をめぐらし、長方形三方の透かしと波状文を持つ。川江編年(川江1979)I期前半(陶器TK208号窯)に比定可能な須恵器であろう。

B2号墳

墳丘・外部施設 東西径8.0m×南北径10.6m 高さ1.5m 東縁が直線状を呈するが、平面形は楕円形に近い。丘陵斜面を削り込み、尾根に直交し、B1号墳の周溝を切断する弧状の溝(幅1.65m 深さ70cm)により墳丘を区画している。西斜面の削り込みは顕著でない。さらに下位の斜面に段が築かれていた。南側溝の尾

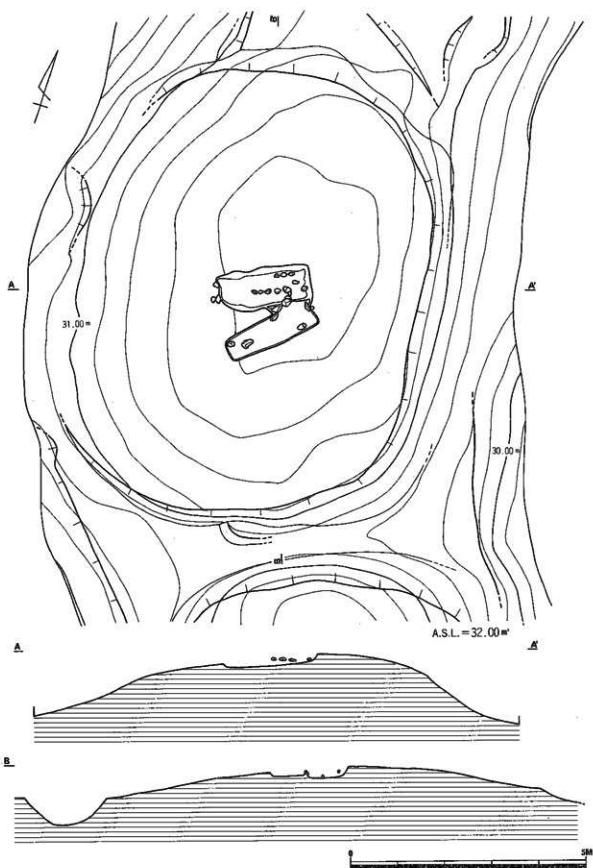
石列が2条認められた。この石列は約30cmの間隔で平行しており、礫の上面は総じて水平である。幅が狭く、棺台と考えている。

南側の主体部は主軸方位N-45°-E 平面細長い長方形(2.0m×0.6m 深さ10cm)をなす。底面は平坦、底面に密着ないし約5cm浮いたレベルに、北側の主体部に比べ若干大きな礫が散在していた。

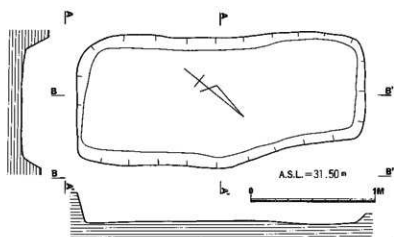
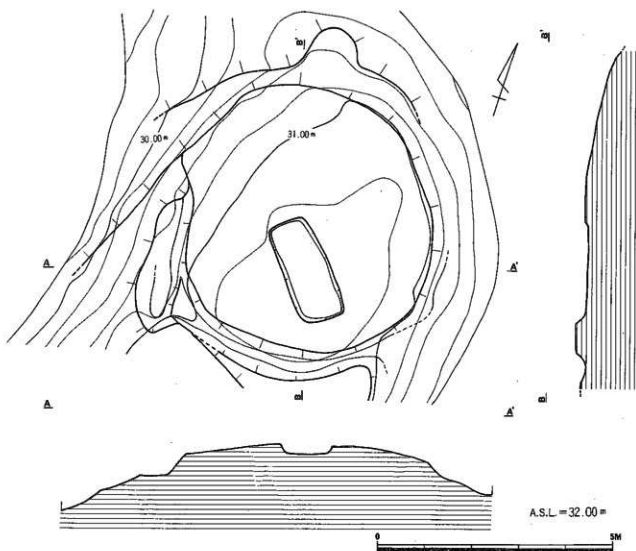
副葬品等遺物 副葬品は無い。南側の周溝内、尾根近くから土師器高杯2点、壺底部片1点(第43図2~4)が一括出土している。高杯は脚を輪接合し、口縁部を外反させ、ヨコナデにより先細く仕上げている。外面にハケメを残す丸底壺は中期的ではあるが、6世紀前半に位置づけられる土器群と判断される。

B3号墳

墳丘・外部施設 径6.5m 高



第19圖 B 2 号墳実測図



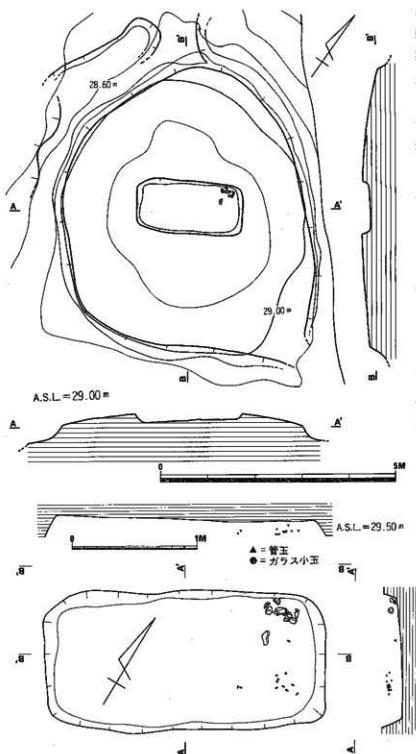
第20図 B3号墳実測図 主体部実測図

さ1.0m 小円墳である。南側の尾根を弧状の溝（幅70cm 深さ20cm）で切断し、他は丘陵斜面の削り込みにより墳丘を区画している。北側にはさらに一段深い削り込みがめぐる。西側の削り込みはわずかに内方に入り込み、一見墳丘から張り出す平坦面のようにも見える。

主体部 木棺直葬 主軸方位 N-39°-W 南に偏して築かれ、掘り方は平面長方形（2.30m×1.05m 深さ25

cm）をなす。基盤層を掘り込み、平坦な底面に礫等は見られない。

副葬品等遺物 副葬品は無い。削り込み内の覆土は（黒色有機質土 暗灰色土）から須恵器・杯



第21図 B4号墳実測図 主体部実測図

である。

副葬品等遺物 主体部東寄りから硬玉製管玉9点(径6~8mm 長さ18~23mm)(第43図13)とガラス小玉6点(径5mm 厚さ2~5mm 一紺色4点 水色2点一)が出土した。これらの玉類は主体部底面から約10cm浮いており、ほぼ水平に分布している。

墳頂部付近の表土下に須恵器甕3個体(第43図8~12)の破片が散在していた。口縁近くに明瞭な

身小片と土師器高杯脚部片・鉄鏃茎(断面方形)と思われる鉄製品(第43図5~7)が1点出土している。立ち上がりが低く内傾する須恵器杯身は著しく編年時期が降る資料であり、当古墳に係わる遺物とは思われない。文様帯(櫛状具刺突)上に上向きの穿孔を有する須恵器甕を基準とすると、その新旧関係は錯誤するが、南側周溝の覆土と類似する土壌(黒色有機質土)が一部B2号墳の周溝を被っていた。

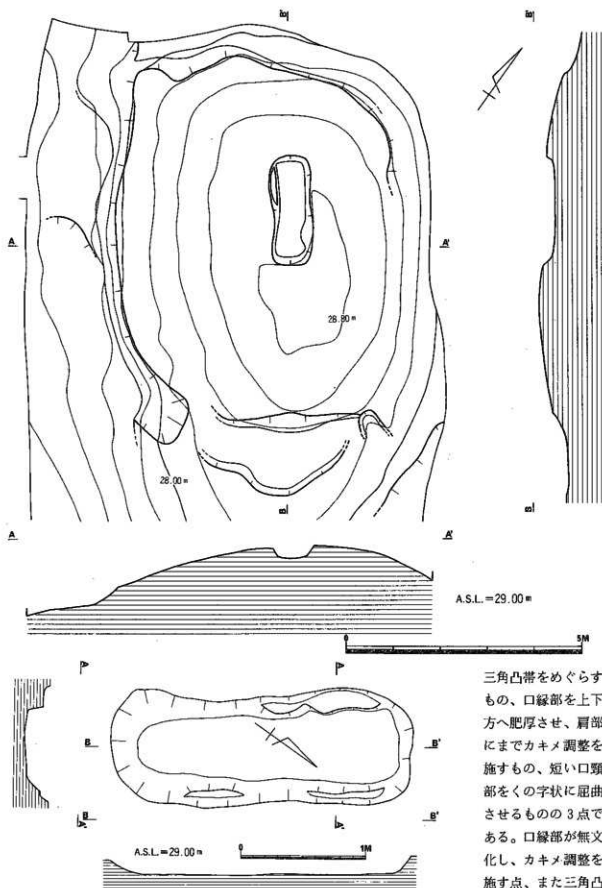
B4号墳

墳丘・外部施設 東西径6.3m×南北径6.5m 高さ60cm

丘陵斜面の削り込みが途切れる南東隅と南西隅にわずかな脹らみが見られるものの、平面形は

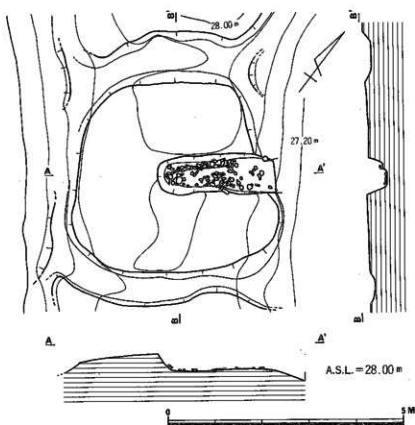
正円に近い楕円形を呈する。削り込みにより墳丘を区画するが、北側では一部周溝状をなし、尾根近くに土橋状の高まりが認められた。墳丘南半には盛土が残る。

主体部 木棺直葬 主軸方位N-59°-E 掘り方は基盤層を掘り込み、平面長方形(2.25m×1.1m 深さ15cm)をなす。東小口部分が若干窪み、北東隅に小礫が集積していた。底面は平坦



第22図 B 5号墳実測図 主体部実測図

三角凸帯をめぐるすもの、口縁部を上下方へ肥厚させ、肩部にまでカキメ調整を施すもの、短い口頸部をくの字状に屈曲させるものの3点である。口縁部が無文化し、カキメ調整を施す点、また三角凸帯が残存し、胴部内



面のタタキ調整をなしかばナデ消している点、これらの須恵器甕は川江編年Ⅰ期後半（陶器TK 23・47号窯）に比定するのが妥当ように思われる。

墳丘盛土内から定角式鉄鍬（第15図214）が1点出土しているが、古墳群と重複する古墳時代前期の集落に伴う遺物である可能性が高い。

B 5号墳

墳丘・外部施設 B地区尾根の最先端に位置する。東西幅6.5m×南北幅7.8m 高さ1.3m 平面弱張長方形をなす。北から西にかけて丘陵斜面を削り込み、南側は溝（幅1.7m 深さ30cm）により区画されるが、東側の斜面に何ら整形は加えら

れない。

主体部 木棺直葬 主軸方位N-36°-E 掘り方の両側には幅の狭い平坦面があり、基盤層を2段に掘り込んでい。平面形は短辺に丸味を持つ長方形（2.4m×0.9m 深さ20cm）をなす。小口側の壁は緩やかに傾斜し、平坦な底面に移行している。

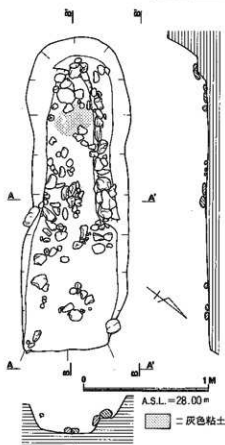
副葬品等遺物 当古墳に伴う出土品は見られない。

B 6号墳

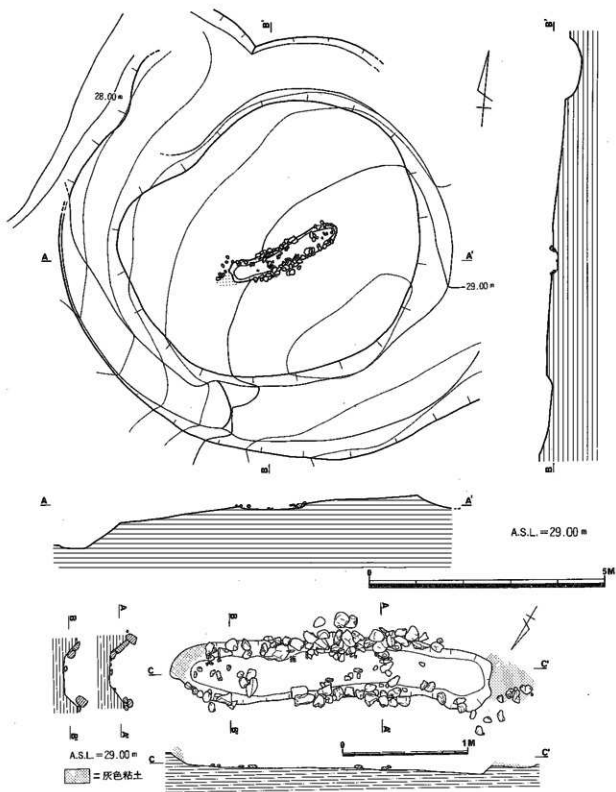
墳丘・外部施設 東西幅4.5m以上×南北幅4.4m 高さ50cm 東寄りの墳丘が一部崩壊しているが、平面弱張方形を呈する。西斜面を削り込み、南北側を尾根に直交する弧状の溝（幅0.7~1.1m 深さ15cm）により区画している。周溝の両端はハの字状に幅を増し、この増幅部にさらに一段深い削り込みが認められる。

主体部 墳丘の東に偏してあり、東端は崩壊している。主軸方位N-53°-E 掘り方の平面形はB 5号墳同様、短辺に丸味を持つ長方形（2.45m以上×0.85m 深さ30cm）を呈する。

北から西にかけて壁の中下位に幅10cm前後の平坦面が見られ、この平坦面の縁に石列が築かれている。敷石様の礫は平坦な底面の西端と中程に集中し、一部南壁に向かい緩やかに



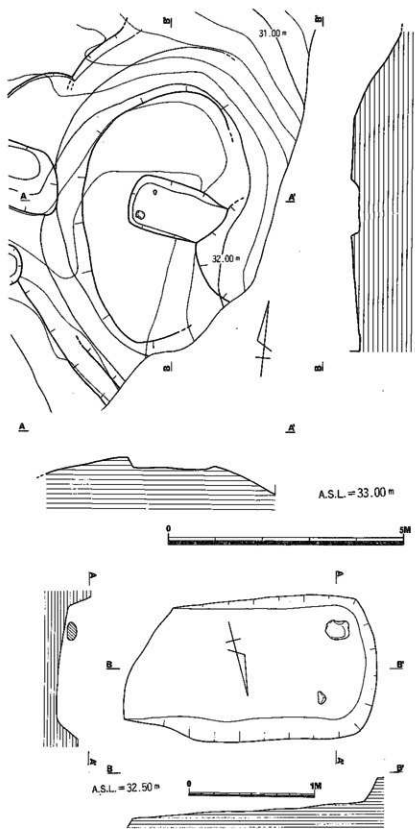
第23図 B 6号墳実測図主体部実測図



第24図 B 7号墳実測図 主体部実測図

立ち上がっていた。西寄りに白色粘土塊が認められる。礫楕状を呈するものの、割竹型(?)木棺の棺台と考えている。

副葬品等遺物 当古墳に伴う出土品は皆無である。



第25図 B 8号墳実測図 主体部実測図

1.5m 深さ約30cm)をめぐらし、旧表土(黒色有機質土)・基盤層を階段状に整形した後、盛土を行っている。平面楕円形を呈する。

主体部 木棺直葬 主軸方位N-76°-W 掘り方は盛土・旧表土を掘り込んでいるが、基盤層に

B 7号墳

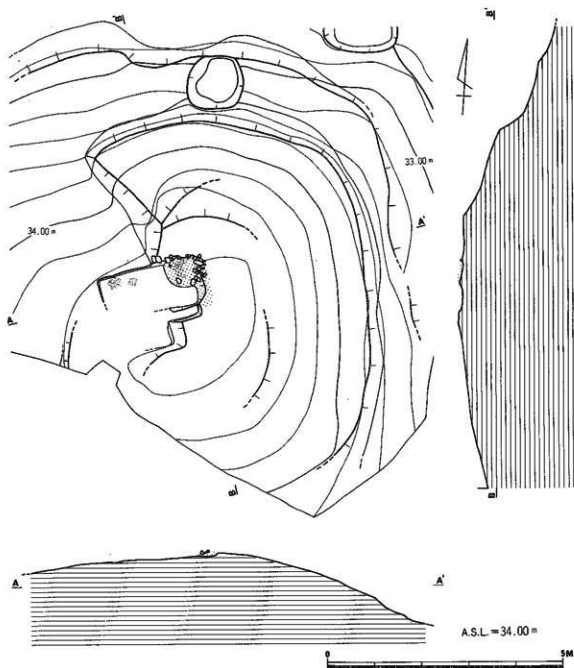
墳丘・外部施設 東西径8.0m×南北径6.3m 高さ1.1m 丘陵斜面部に位置する。北・西・南側に明瞭な周溝(幅1.3~2.1m 深さ20~55cm)をめぐらし、平面不整形円形をなす墳丘の大半は盛土により築かれている。

主体部 主軸方位N-58°-E 掘り方の平面形は東端の尖った舟型(2.55m×0.6m 深さ15cm)を呈する。両側壁は緩やかに傾斜し、この傾斜面に沿って中小の礫が積み上げられていた。積石の断面は弧状をなし、割竹型木棺(長さ約2.2m)が納められていたものと推定している。両小口に白色粘土塊が残存していた。

副葬品等遺物 北側の石積み近くに甕(第43図15)が副葬されていた。また南側周溝内に落ち込んでいた須恵器杯蓋(第43図14)は口縁端部を内傾させ、天井部内面に不定方向のナデを加える。肩部の稜は退化しており、川江編年Ⅱ期(陶器MT15・10号窯)に対比される資料であろう。

B 8号墳

墳丘・外部施設 南北径6.7m 高さ1.0m 丘陵斜面部に立地し、すでに墳丘の東半は崩壊している。北から西にかけて周溝(幅1.3~



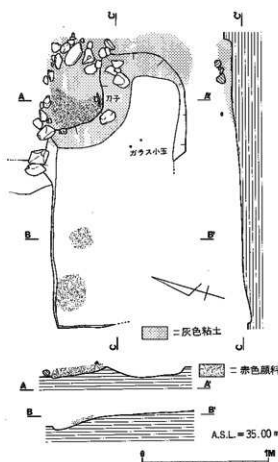
第26図 B 9 号墳実測図

は達していない。東端が崩壊しているものの、平面形は長方形（1.95m以上×1.15m 深さ25cm）をなすと思われる。平坦な底面は北・東に向かいわずかに傾斜し、西隅に大小の礫が2個認められた。

副葬品等遺物 副葬品は無い。墳丘から内面にハケメを施した土師器丸底甕の底部片（第43図16）が1点出土している。

B 9 号墳

墳丘・外部施設 B地区古墳群の中央に位置し、もっとも高所に築かれている。墳丘の西半は茶畑の開墾により破壊されていた。南北幅9.2m 高さ1.7m 丘陵斜面を削り込み、胴張方形の墳丘を造り出す。北側の斜面下位にはさらに一段明瞭な削り込みが認められ、北から眺めると一見二段築成



第27図 B9号墳主体部実測図

墳丘・外部施設 東西径6.0m×南北径7.5m 高さ1.2m 三隅が若干張り出すものの、平面形は楕円に近い。北・東側は丘陵斜面を削り込み、西から南にかけてめぐる明瞭な周溝（幅0.9～1.5m 深さ20cm）により墳丘を区画している。周溝の両端はハの字状に開き、丘陵斜面に移行する。墳丘北東半に盛土を残している。

主体部 わずかに東に偏して、主軸方位を異にする2基の主体部を有する。

北寄りの主体部はN-88°-W 西壁は不明瞭で、北東隅が彎曲しているため断定できないが、平面形は不整長方形（1.65m以上×1.0m 深さ15cm）を呈する。掘り方は盛土と基盤層を掘り込み、南北壁から約10～20cm離れて、西半にこぶし大礫を用いて礫床を築いていた。礫床を欠く東半の壁の立ち上がりは明瞭で、後世の攪乱等により礫床が失われたとは考えられない。

南寄りの主体部はN-27°-W 掘り

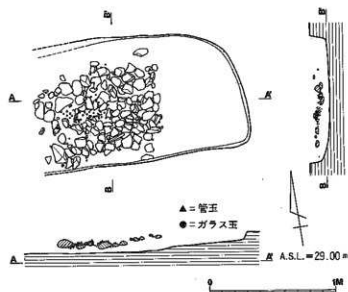
のように見える。

主体部 主軸方位N-73°-E 掘り方の西半は削平され、底面近くしか残っていないが、その輪郭は平面長方形（2.15m×1.05m 深さ10cm）をなす。平坦な底面は西に向かいわずかに傾斜し、西・北縁が窪んでいた。北東隅の掘り方に沿って礫床状の石積みめくり、この石積み混じって、東隅には一面白色粘土（厚さ10cm）が広がっていた。北半の底面から2ヶ所、白色粘土塊上から1ヶ所、赤色顔料（？）が検出されている。

主体部南半では白色粘土が急激に減少し、またこの減少部分の底面が若干立ち上ることから、あるいは主軸方位を同じくする2基の主体部が重複しているのかもしれない。

副葬品等遺物 白色粘土塊上に両関作りの刀子（第43図18）1点が、鋒を東に向け副葬されていた。また主体部南半東寄りから、滑石製管玉（第43図17）（径5・6.6mm 長さ23・21mm）が2点、ガラス小玉（径2～5mm 厚さ2～3mm）が4点（紺色1 青色1 水色2）出土している。管玉は両側穿孔である。他に削り込み部・墳頂等からの出土品は無い。

C1号墳



第28図 C1号墳主体部実測図

方は平台台形(1.15m×0.7m 深さ10cm)を呈する。底面は平坦であり、小形の箱式木棺を直葬していたものと思われる。

副葬品等遺物 北寄り主体部の礎床ほぼ中央に、硬玉製管玉9点(第43図23)(径6~8mm 長さ14~24mm)とガラス小玉83点が集中していた。管玉はすべて片側から穿孔され、ガラス小玉には大小(径4.5~6mm・2~3mm 厚さ3~6mm・1.5~2mm)の2種(大=紺色7 水色1 小=紺色57 水色11)がある。また北側削り込み部の覆土(黒灰色土)から須恵器甕1点と外面に交差するタタキ痕を残し、内面は半ばナデ消している中形甕片10数点(第43図19~22)が出土している。甕は底部外面に不定方向のナデ調整痕、胴部中にカキメを残し、口頸部に1条櫛描波状文を施す。川江編年Ⅰ期前半(陶器TK208号窯後半)に比定可能な須恵器と思われる。

C2号墳

墳丘・外部施設 東西径8.9m 高さ1.6m 丘陵斜面を若干削り込んでいるが、尾根側に溝等は認められず、墳丘の区画は総じて不明瞭である。北東半の基盤層上に広がっていた人頭大・こぶし大礫の並びに規則性は見られない。

主体部 主軸方位N-10°-E 掘り方の両端は徐々に細くなり、南端では底面が緩やかに立ち上がって、船の船先を連想させる(3.75m×0.84m 深さ20cm)。東西の壁の近くに径10~35cmを測る楕円形礫が落ち込んでいた。

副葬品等遺物 墳丘周辺から弥生土器片が20数点採集されているが、他に出土品は皆無である。

C3号墳

墳丘・外部施設 C地区丘陵の最先端に位置する。南北径6.5m 墳丘は後世の掘乱と崩壊により完全に失われていたが、基盤層を掘り込んだ周溝(覆土=黒色有機質土)は北東・南東隅で途切れながら弧状に伸びる。

主体部 不明

副葬品等遺物 墳頂部にあたる表土から大刀と鉄鏃(第43図25・28)が各1点出土した。大刀は現存長31.5cmと小振り、目釘孔が2ヶ所穿たれている。目釘は木製である。柄および鞘材と思われる木質が付着していた。鉄鏃は基部を欠損しているが、篋の長い三角形平根鏃で、茎に巻糸の痕と篋を巻いた棒皮を残していた。他に周溝内から断面台形様をなす滑石製紡錘車片・刀子片・鉄鏃茎片が各1点、逆刺があり腸扶式に類する平根鏃(第43図24・26・27・29)が1点出土している。腸扶式平根鏃には篋の先端痕が残っていた。

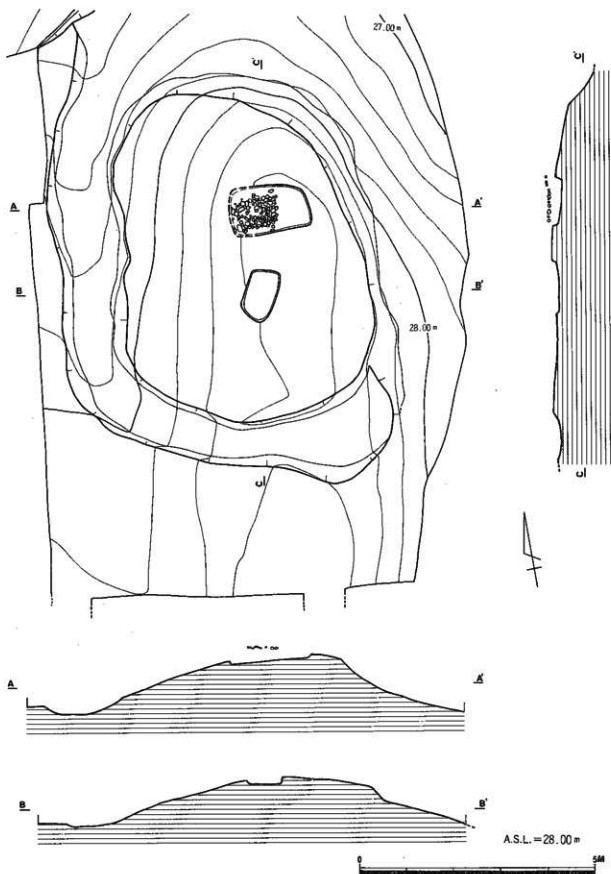
C4号墳

墳丘・外部施設 B~D地区の3条の尾根が一つにまとまる一段高い丘陵の頂部にC5号墳と併に立地する。東西径7.5m×南北径5.0m 高さ0.9m 平面楕円形をなす。丘陵斜面の削り込みにより墳丘を区画し、東側掘り込み部に平面方形様(70cm×80cm 深さ15cm)の落ち込みが1ヶ所ある。

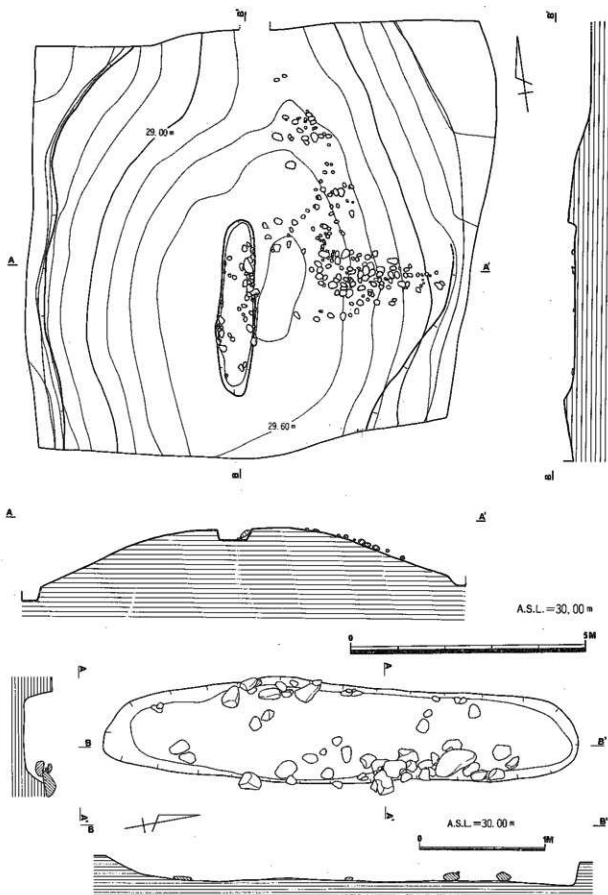
主体部 重複する2基の主体部を持つ。

先行する主体部は木棺直葬 N-59°-E 掘り方の南西端が後出の主体部により壊されていたが、平面長方形(1.70m以上×0.75m 深さ15cm)を呈すると思われる。北東隅にこぶし大礫が集中し、掘り方両端の底面には白色粘土塊が残存していた。

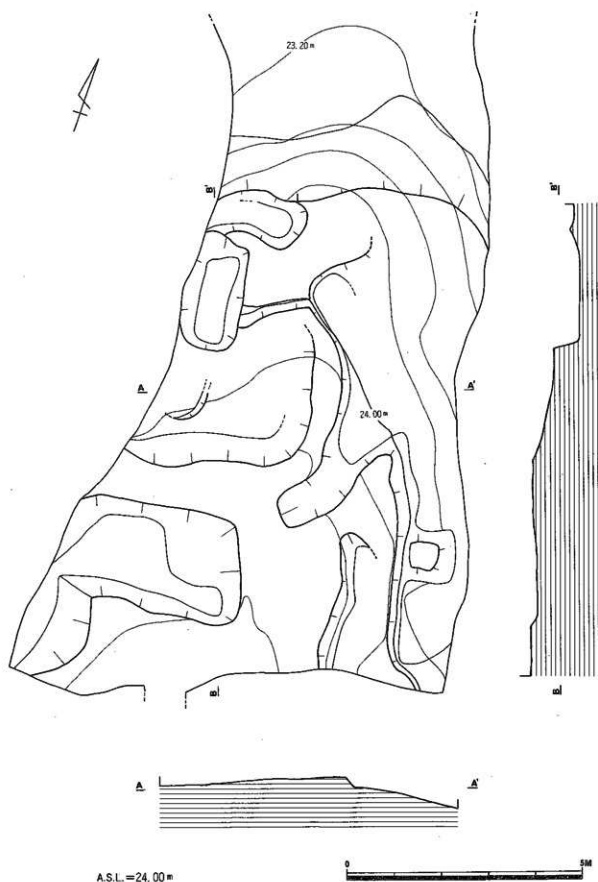
後出の主体部はわずかに西に偏して築かれている。N-1°-E 崩壊し掘り方南端の輪郭は不明瞭となるが、北端は整った方形(2.40m以上×0.8m 深さ15cm)を呈する。北隅一面に白色粘土塊が見られる。西壁に沿って並ぶ5個のこぶし大礫の上面はすべて内傾しており、また平坦な底面の中央が帯状に窪むことから、納められていた木棺は割竹型であったと推定している。



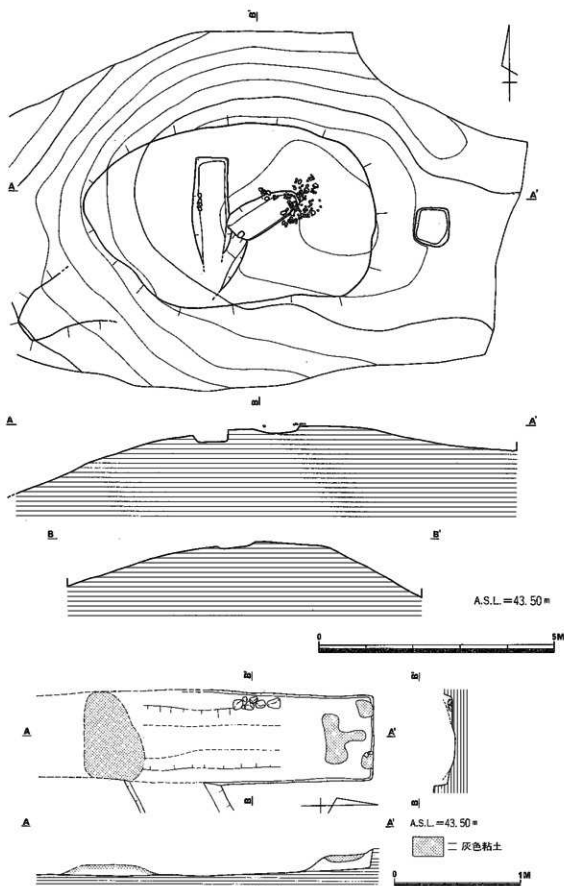
第29圖 C 1 号墳実測図



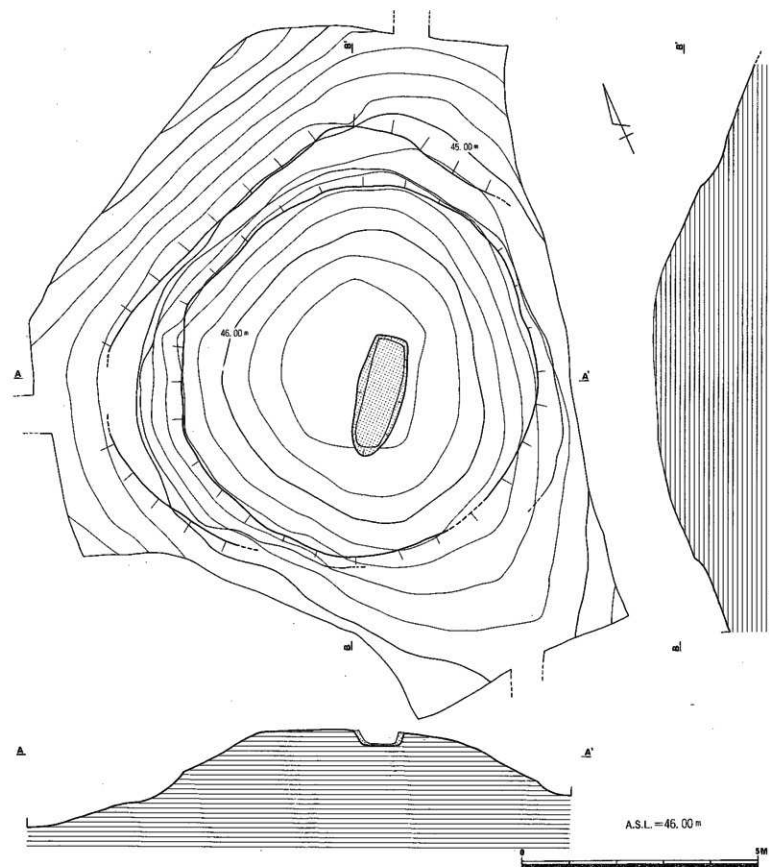
第30图 C 2号填实测图 主部实测图



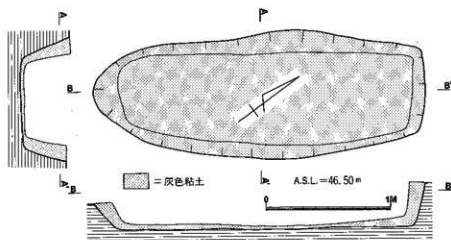
第31圖 C 3 号墳実測図



第32图 C 4号填实剖面图 主体部实测图



第33圖 C 5 号墳実測図



第34図 C5号墳主体部実測図

方へ若干膨らむ削り込みが見られる。

主体部 粘土槨 N-36°-E 掘り方南端の壁の傾斜は緩やかとなり、平面形は船形(2.65m×1.1m 深さ35cm)を呈する。小口側で厚さ10~15cm 側壁に沿って厚さ5~10cm 平坦な底面上に厚さ約5cmの白色粘土が残る、箱式木棺を粘土で被っていたことは明らかである。

副葬品等遺物 主体部の北寄り、上半に落ち込んでいた暗灰色土中から水色を呈する大小のガラス小玉(径2~4mm 厚さ3~5mm)が3点出土している。掘り方底面から約30cm浮いており、副葬品とするには検討を要する。

C6号墳

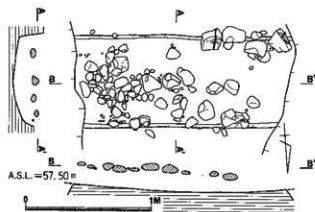
墳丘・外部施設 根根頂部を除き、丘陵の崩壊は著しく、墳形を知りえない。

主体部 主軸方位N-86°-W 両端が崩壊している。側壁は直線状を呈する(1.7m以上×0.75m 深さ15cm)。掘り方の底面中央がわずかに窪み、10~15cm浮いた高さに水平に広がる礫床状の礫の集まりが認められた。礫には大小差があり、上面は整えられていない。

副葬品等遺物 当古墳に伴う出土品は見られない。

C7号墳

墳丘・外部施設 東西径6.8m×南北径6.1m 高さ80cm 東縁がわずかに突出するものの、平面形は楕円形に近い。南側に周溝(幅0.7~1.1m 深さ10~30cm)を掘り、墳丘の大半を盛土(暗褐色土・黒灰色土)により築いている。周溝は墳丘の東側で幅を増し途切れる。分岐し屈曲する小溝が1条ある。



第35図 C6号墳主体部実測図

主体部 平行する2基の主体部を有する。

西寄りの主体部は木棺直葬 N-3°-E 掘り方は平面船形(3.4m×0.7m 深さ30cm)を呈する。南端に向かい幅を減じ、平坦な底面も徐々に浅くなる。

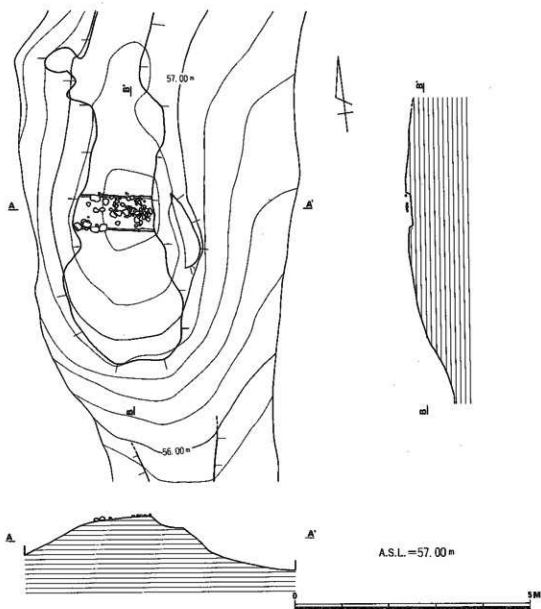
東寄りの主体部は墳丘のほぼ中央に位置する。木棺直葬 N-9°-E 北端が丸味を持つものの、掘り方の平面形は長方形(1.65

副葬品等遺物 当古墳に伴う出土品は皆無である。

C5号墳

墳丘・外部施設

東西径8.8m×南北径8.7m 高さ1.6m 丘陵斜面を削り込み、整った円形の墳丘を造り出している。北から西にかけては、さらに下位の斜面に、北および西



第36図 C 6 号墳実測図

m×0.8m 深さ20cm)に近い。壁の傾斜は総じて緩やかであり、平坦な底面が西寄りの主体部同様徐々に浅くなっている。

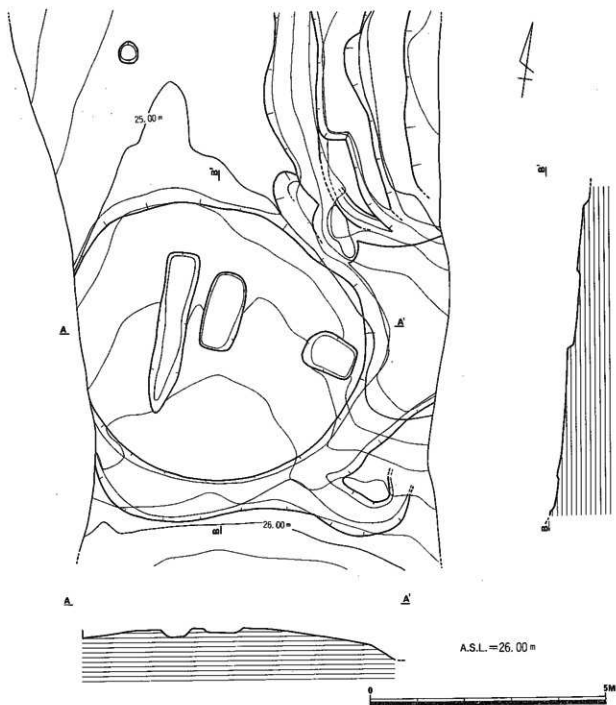
副葬品等遺物 副葬品は無い。南側の周溝内から内面のタキ痕を半ばナデ消した須恵器甕肩部片(第43図30)が1点のみ出土している。

D 1号墳

墳丘・外部施設 D地区丘陵の先端部近くはすでに広く削平されており、D 1号墳の墳形はわからない。西側斜面にわずかに残る基盤層の削り込み(覆土・黒色有機質土)は平面弧状を呈していた。

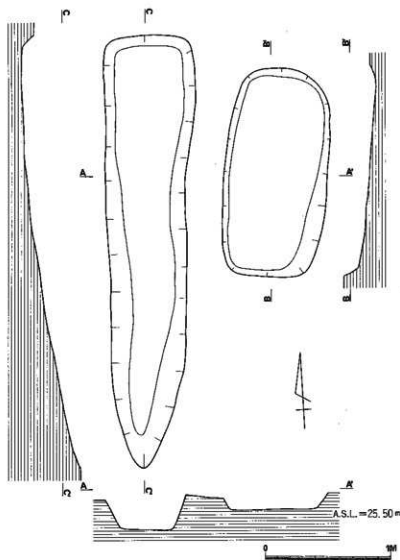
主体部 不明

副葬品等遺物 西側斜面の削り込み内から須恵器杯蓋5点 杯身8点 短頸壺1点 特殊器形1点 把手状製品1点 土師器高杯7点 杯身1点 壺1点と鉄製刀子1点(第44図32~46)が一括出土した。



第37図 C 7 号墳実測図

須恵器杯蓋は最大径13.3～15.1cm 器高4.2～4.5cm 口縁端部は凹曲気味に内傾する。肩部の稜は形骸化しており、天井部内面に不定方向のナデ痕を持つ。杯身は最大径13.5～14.7cm 器高4.2～5.5cm 立ち上がりが直線的に伸びるものと彎曲するものがある。端部を丸く仕上げ、杯蓋同様底部内面に不定方向のナデを加える。特殊器形としたもの（第44図40）は小破片ではあるが、杯身とよく似た口頸部形態（立ち上がりと受部）を呈していたのではないかと推定している。須恵器は川江編年Ⅱ期（陶邑MT15・10号窯）に属すると判断される。



第38図 C7号墳主体部実測図

土師器高杯は口径14.1~15cm 器高8cm前後 すべて脚を輪接合している。脚部の形態には均一に外反しつつ伸びるものと端部近くでわずかに屈曲するものの2種があり、口縁部に端部に丸味を持つものと、外反させ先細く仕上げるものの2形態が見られる。前・後者どうしが対応するようであるが、直接接合する破片は少ない。杯身は須恵器の模倣品である。口縁部をヨコナデ調整し、底部外面に顕著な指頭痕を残す。

刀子は両関作りで、身が短い。

D2号墳

墳丘・外部施設 近・現代の基地により墳丘の西・南裾はすでに広く削平されていた。東西径13.1cm×南北径10.6cm 高さ1.6m 北東・南西隅がわずかに膨らみ、北側の墳丘裾が直線状を呈しているが、平面形は楕円形に近い。丘陵斜面の削り込みのみにより墳丘を区画している。

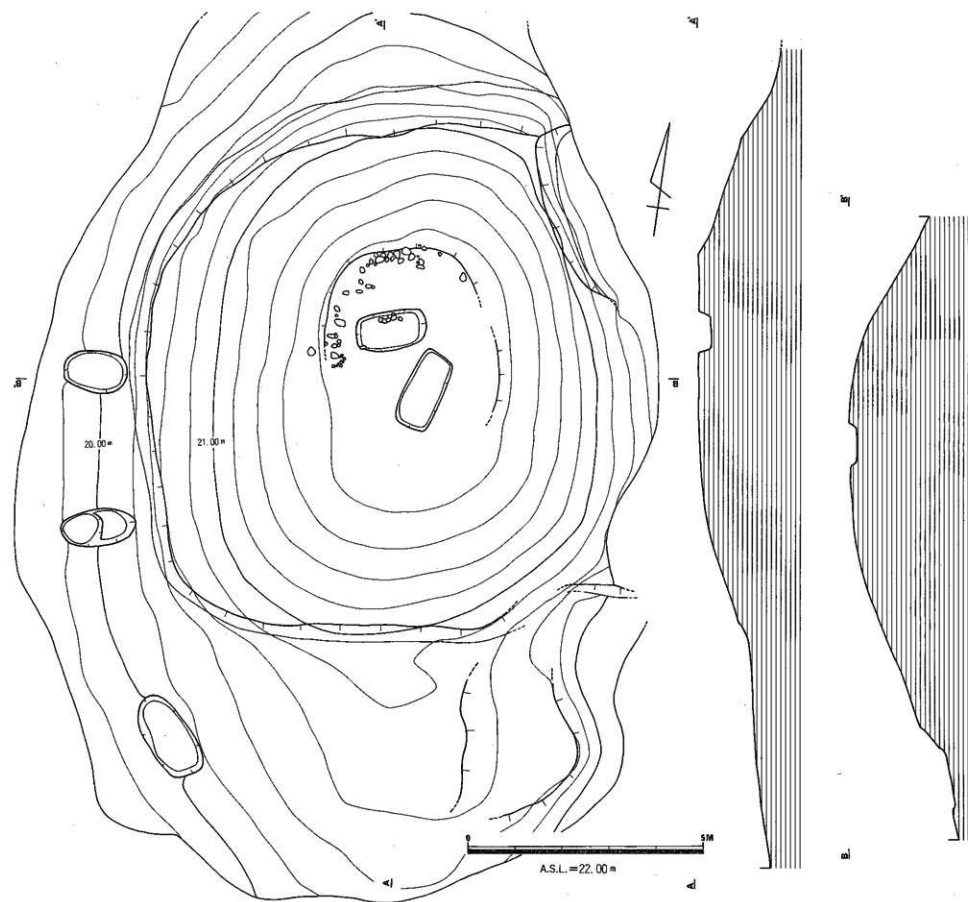
主体部 木棺直葬 N-80°

-W 掘り方は平面長方形(1.95m×0.95m 深さ5cm)をなす。底面は平坦である。

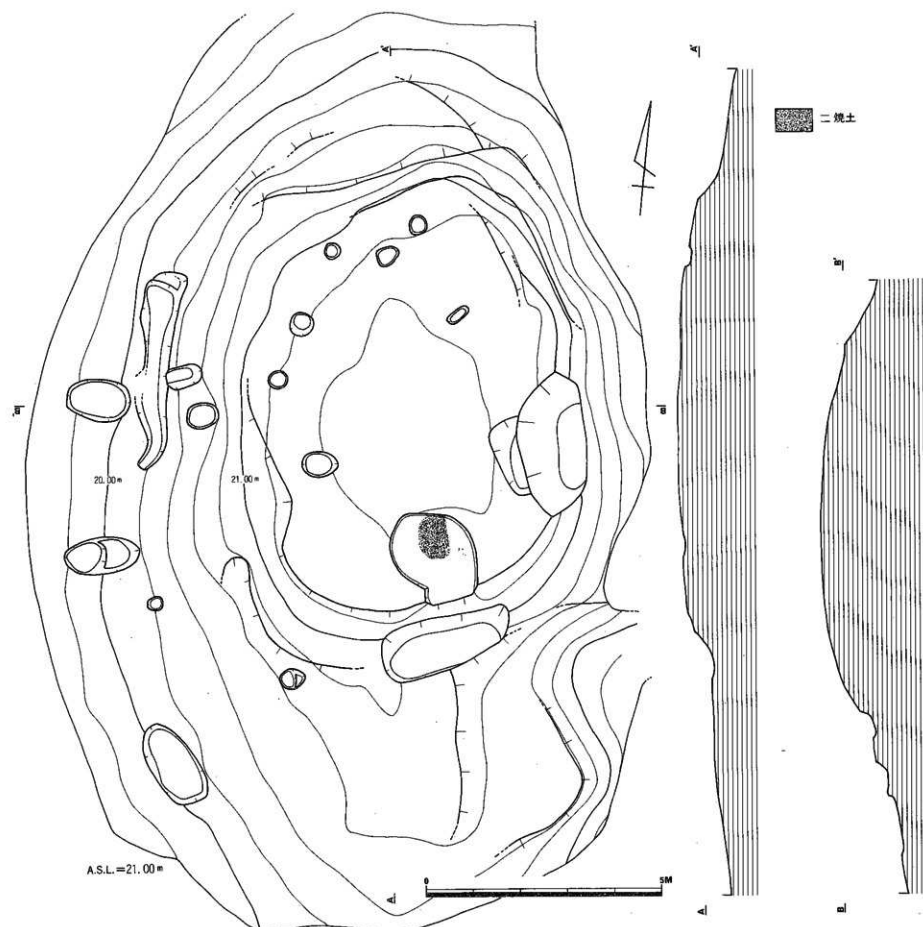
副葬品等遺物 北寄りの底面に密着して鉄鍬茎片(?) (断面方形)が2点出土している。また主体部覆土(黒灰色砂質土)中に滑石製臼玉(径2.5~3mm 厚さ1.5~2.5mm)8点が含まれていた。東側墳丘から出土した土師器高杯脚部片(第44図47)は縦位のミガキ痕を持ち、端部が屈曲外反する中期的形態を呈している。

E1号墳

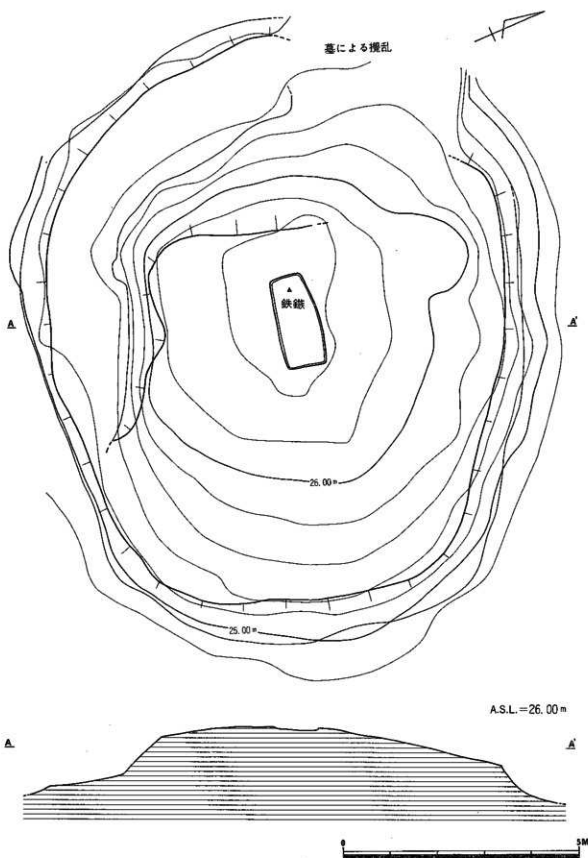
墳丘・外部施設 E地区丘陵の最先端に立地する。東西径10.8m×南北径11.6m 高さ2.3m 北から西・南にかけて丘陵斜面を削り込み、平面胴張長方形の墳丘を盛土により築いている。東側斜面の整形は顕著でない。墳頂部北・西寄りの表土直下に帯状に分布するこぶし大礫が認められたが、後世に属する可能性がある。墳丘盛土を除去したところ、基盤層は平坦に整形されており、この整形面に7ヶ所の柱穴状の落ち込み(径20~75cm 深さ15~50cm)と浅い堅穴内に残る焼土(60cm×90cm)が確認された。また西側削り込み斜面部に平面楕円形を呈する堅穴(覆土・暗褐色土)(長径0.85~1.9m 短径80~95cm 深さ25~40cm)が3ヶ所掘られていた。



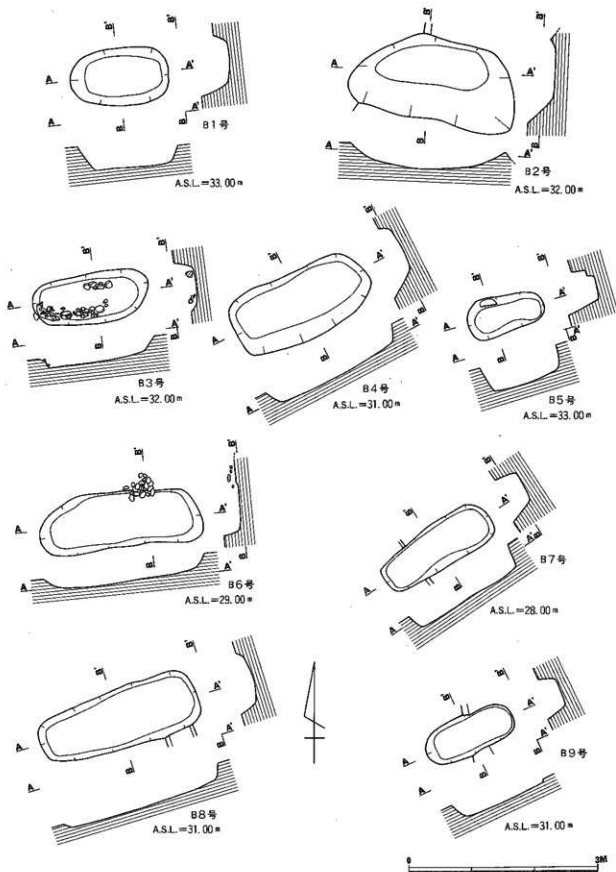
第39图 E 1号墳实测图



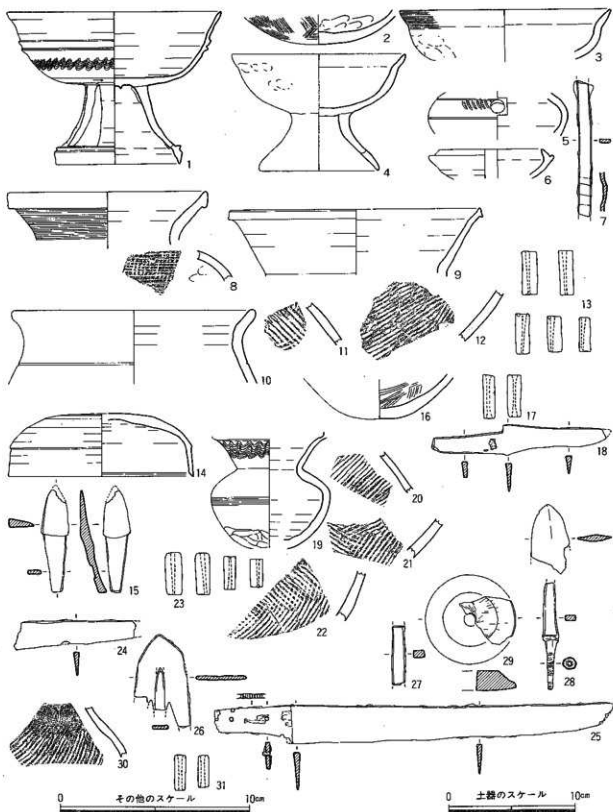
第40図 E 1号墳整地面実測図



第41図 D 2 号墳実測図

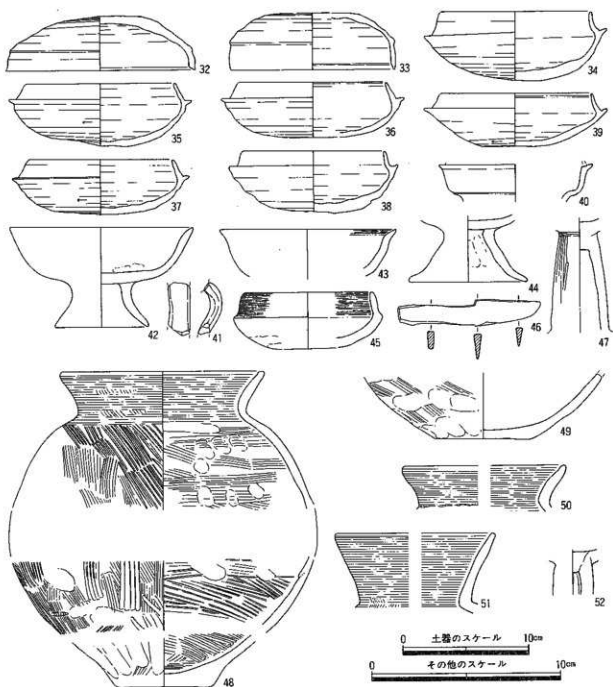


第42图 木棺墓实测图



第43図 古墳出土遺物(1)

1 B 1号墳 2~4 B 2号墳 5~7 B 3号墳 8~13 B 4号墳 14・15 B 7号墳
 16 B 8号墳 17・18 B 9号墳 19~23 C 1号墳 24~29 C 3号墳 30 C 7号墳
 31 B 1号木棺墓



第44図 古墳出土遺物(2)

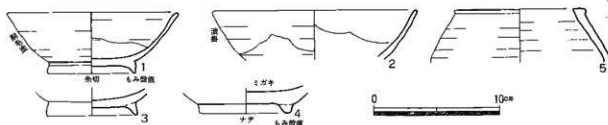
32~46 D 1号墳 47 D 2号墳 48~52 C地区先端部

主体部 主軸方位を異にする主体部を2基有する。

北寄りの主体部は木棺直葬 N-74° -E 掘り方の輪郭は丸味を持つものの平面長方形(1.50m × 0.95m 深さ25cm)を呈する。北壁に沿ってこぶし大礫が7個並んでいた。底面は平坦である。

南寄りの主体部は木棺直葬 N-16° -E 掘り方は平面長方形(1.65m × 0.8m 深さ20cm)をなし、底面は平坦である。

副葬品等遺物 当古墳に伴う出土品は見られない。



第45図 平安時代以降の陶器（D地区先端部出土）

ii) 木棺墓群

B地区北斜面において9基の木棺墓を検出した。9基はB9号墳北裾（B1～5号木棺）と斜面下位（B6・7号木棺）および丘陵頂西端近く（B8・9号木棺）に別かれ分布している。平面不定形、断面すり鉢状を呈するB2号木棺を除き、平面形は隅丸長方形様をなし、平坦な底面から屈曲して立ち上がる壁の状況から見て、木棺を納めていたものと思われる。B5・9号木棺（1.25・1.5m × 0.65m 深さ55・40cm）は小規模であるが、他は古墳の主体部とほぼ同じ大きさ（1.55～2.6m × 0.7～1.1m 深さ30～60cm）を示す。B3号木棺では底面に2条の石列（棺台）を築き、B3・4・6・8号墓の小口側には灰白色粘土塊が残っていた。すべて暗褐色土を覆土とし、B8号木棺から硬玉製、両側穿孔の管玉（第43図31 径8・9mm 長さ25・28mm）が2点出土している。

B7～9号木棺は古墳時代前期の堅穴住居を切断している。またB1・2号木棺はB8号墳の周溝によって壊されており、木棺墓群は古墳群形成の比較的早い時期に伴うものではないかと考えている。

第5節 奈良・平安時代以降

B地区北斜面の下位に堆積した暗褐色土から縄文土器・黒曜石剥片に混じって奈良時代後半の盤状をなす須恵器無台杯身片と灰釉陶器片が数点出土している。またD地区丘陵の先端部近くからも、灰釉陶器、山茶碗片（第45図）を10数点採集した。

1（口径13.6cm 器高4.9cm）は口縁を外反させない碗で、底部に糸切り痕、高台端部に朽痕を残す。灰釉を刷毛塗り（？）し、胎土中に鉄分粒子がめだつ。清谷窯の製品と考えられ、その焼成時期は広久手Cー3号窯に並行するものと思われる。2は底部をナデ調整し、灰釉を濃く掛けしている。清谷窯兎湖赤山窯ないし赤山窯の製品と思われる。3・4は湖西・瀬美窯産の、12世紀後半に比定可能な山茶碗片である。高くしっかりした高台の端部に朽痕を残し、内面を磨いている。底部はナデ調整される。5は志戸呂焼の蔵骨器で、江戸時代末に位置づけられる。類品が南西方約800mにある上石野1号墓から出土している。

灰釉・山茶碗が伴う遺構は明瞭でないが、弥生・古墳時代の柱穴とはその覆土を異にし（黒色有機質土）、D地区丘陵の先端に分布する方形の小柱穴群がこの時期に属するものかもしれない。

第3章 総 括

第1節 若 作 遺 跡

i) はじめに

若作遺跡の弥生～古墳時代前期の遺構については、すでに第2章第3節に詳述されているが、本節ではそれについて再度まとめ問題点を明らかとした後に、比較的資料の豊富であった古墳時代前期（B、D地区）の集落について検討してみたい。

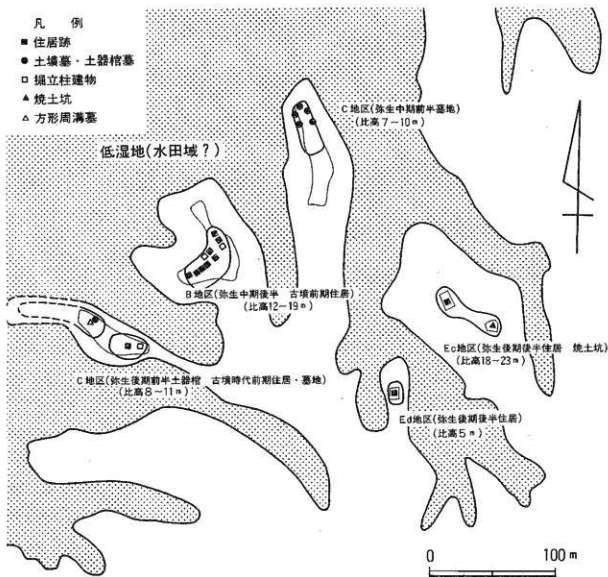
ii) 弥生時代の集落について

弥生時代の遺構・遺物の発見された地点は、B～C地区、E c、E d地区の5地点に分かれる。いずれもさほど広くない丘陵上に立地している丘陵性の遺跡である。

弥生時代の最初の遺構は、C地区で中期前半（丸式）の墓と思われる土坑が発見されている。若作遺跡の周辺では、愛野向山Ⅱ遺跡C地区、愛野向山Ⅲ遺跡で前期の水神平2式が出土している。若作遺跡と同様に土器棺と思われる遺物であることから、墓域の発見にとどまり明確な居住域としての集落を認めることはできなかったが、次の予察が可能であろう。若作遺跡の周辺では弥生時代前期～中期前半にかけて、(1)丘陵地に小規模な集落がありその墓のみが発見された場合、(2)丘陵地が墓域として付近の低地には居住域が営まれた場合の2点が考えられる。若作遺跡の場合はD地区でも丸式土器が出土していることから(1)の場合に該当するかも知れないが、D地区では明確な遺構が発見されていないため推定の域をでるものでない。弥生時代中期前半は掛川市原川遺跡に見るように、すでに低地に集落が営まれ稲作農耕を行っている状況証拠が明らかとなりつつある。これにたいして、若作遺跡の場合は丘陵上に立地する遺跡ではあるが、C地区の低地との標高差は7～10m、D地区では8～11mを測りさして高い丘陵には立地していないことと、丘陵が水田域と考えてもよい低地に面していることから、必ずしも稲作農耕が不可能な状況とはいえない。むしろ、静岡市の丸子セイゾウ山遺跡（標高100mの高地に立地）などとは異なった状況をあてはめるべきであろう。

弥生時代中期後半（白岩式）の遺構は、B地区の5、8住居跡の柱穴から発見されており、当該時期の住居跡が存在した可能性が高い。中期後半の丘陵立地の住居跡は、愛野向山Ⅱ遺跡B地区から1棟、島田市の東山古墳群でも1棟が発見されている。今のところ類例が少ないものの、中期後半にも丘陵性の小規模な集落が存在する事が確かめられつつある。遠江で丘陵立地の遺跡の数が爆発的に拡大する弥生時代後期後半とのつながりは不明といわざるをえないが、愛野向山Ⅱ遺跡、豊岡村の新平山遺跡や浜松市の向山遺跡など後期前半からの集落も存在することから、丘陵立地の集落は数少ないものの中期前半～後期前半まで存在し、後期後半に集落規模が拡大し遺跡数も多くなる状況といえそうである。なお、中期後半～後期後半まで継続する丘陵立地の集落は愛野向山Ⅱ遺跡などがあるが、集落規模が拡大するのは後期後半である。

後期後半の遺構は、E c地区で住居と焼土坑、E d地区で住居の痕跡と思われる土坑や遺物の出土があった。とくにE c地区での住居1棟と焼土坑の併存の可能性が注目される。弥生時代後期の焼土坑と思われる遺構の発見例は、愛野向山Ⅱ遺跡B地区、掛川市安養寺遺跡など原野谷川水系の丘陵性遺跡と菊川町の三沢西原遺跡などで認められるようになってきている。これらの遺跡の立地は周辺の見通しのよい遺跡に発見されてきており、若作遺跡を含めた原野谷川水系の焼土坑発見遺跡の場合では相互の位置を確認できうる場所に立地している。



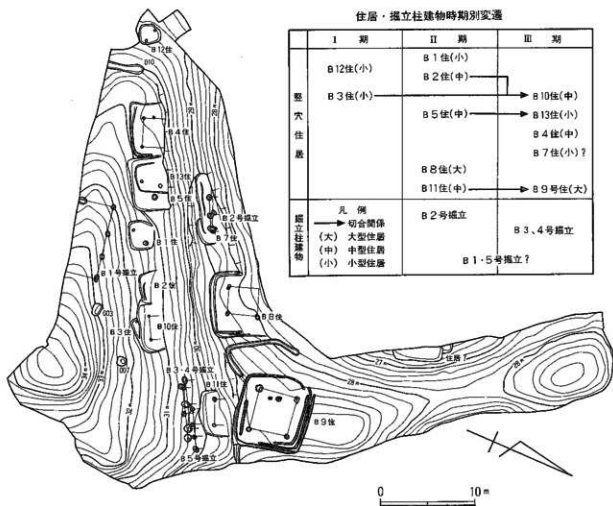
第46図 若作遺跡弥生・古墳時代前期の集落模式図

この弥生時代の焼土坑については烽火台と関連つけた遺構とする見解がある(都出1974)。これにたいして森岡氏は焼土坑を集成したなかで、それぞれの焼土坑についての性格を考えた場合、焼土坑のすべてを烽火台と断定はできないとする意見もある(森岡1985)。若作遺跡の場合は、焼土坑と1棟の竪穴住居の組み合わせがあること、他の同時期の遺構もわずかにEd地区で竪穴住居1棟分の痕跡が発見できたにすぎないことから竪穴住居1~2棟からなる非常に小規模な集落であること、遺跡内では比較的高所である低地面との標高差23mの位置に焼土坑があることなどを考え合わせると、例えば至近距離(1km)にある愛野向山II遺跡から派生した烽火台専用の小集落とも考えることができるが、それを断定するには現在知りうる焼土坑の発見例があまりにも少なく、集落間の烽火通信の具体像を導き出すことは困難な現状である。しかし、中遠地域の後期後半の丘陵性遺跡のなかに濠をもつ囲郭集落の発見例もふえつつあり、中遠地域における弥生時代後期後半の軍事的な緊張関係の存在が目まぐるしくなっている(松井1988)。これらの丘陵立地の囲郭集落の存在と、若作遺跡の焼土坑を関連づけることも可能であろう。

iii) 古墳時代前期の集落について

古墳時代前期の遺構はB地区、D地区で発見されている。B地区の遺構の状況については再度、第47図にまとめてみた。図中の時期別変遷図のⅠ期とⅡ・Ⅲ期は主に土器の新旧で、Ⅱ期とⅢ期は遺構の切り合い関係や配置で時期の分別を行っているため、Ⅱ期とⅢ期については一部机上操作が入るがほぼ大過ない変遷と見ている。この変遷をみると、Ⅰ期は小形住居2棟で小規模な集落、Ⅱ期・Ⅲ期は集落規模が拡大し大形住居1棟を中心とし、中形住居2～3棟、小形住居1～2棟、掘立柱建物1棟となる。さらに、遺構の分布から単位群の抽出を試みたが、分別できず1単位の住居群の集落であることが判明した。

次に各遺構の性格について考えてみたい。まず特徴的な大形住居について述べてみたい。遠江において古墳時代前期の集落が判明した例は少ないが、いくつか代表的な例を検討しておこう。西遠江の浜松市中平遺跡では竪穴住居165棟、掘立柱建物3棟が発見されており、なかでもS B108と称せられた手埴型土器が出土している平面積約80㎡を測る大形住居1棟、平面積約50㎡以上になるものが8棟あり、大形住居の保有率を示すと約5%となる。若作遺跡の場合Ⅱ・Ⅲ期の大形住居の保有率は2%で中平遺跡の場合のほうがやや高い保有率を占めているようである。分布も偏るのではなく、いく



第47図 B地区古墳時代前期の遺構変遷図

つかの住居群の単位の中に1棟づつ展開しそうなようである。近年浜松市の大平遺跡で古墳時代前期の良好な遺跡の調査が行われ、数棟の竪穴住居に大形住居がともなっていることが判明した。なかでも注目されるのは、若作遺跡のB9号住居の西側に掘られた排水溝の構造はよく似ており、両者の構造の類似性が指摘しうる。また、B9号住居の土器組成を見てみると、壺20%、小形鉢14%、鉢1%、高坏35%、甕29%となり、高坏と鉢の合計で50%という供膳形態の土器が異常に高い比率を示している。他の住居の資料が少ないためデータとしては充分でないが、大形住居のB8、B9号住居を除いた器種の比率は壺43%、高坏18%、小形鉢6%、甕33%と高坏と小形鉢の合計は24%となりB9号住居跡の特殊性がうかがえる。それが何を示すのか、単純ではあるが大形住居は祭祀的色彩と集落の共有性の強い住居であったと結論づけておきたい。

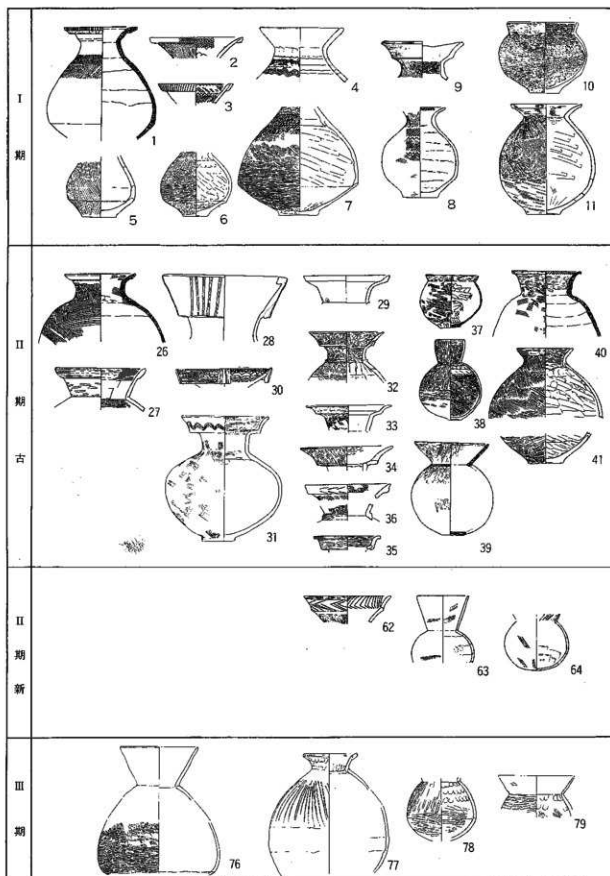
掘立柱建物については、B2号掘立柱建物、B3、B4号掘立柱建物としたものは山側の桁方向のみが検出され、谷側については柱穴が流失したため全体形は判らない。桁行規模は3.5m～5mを測る規模のもので、柱穴規模も直径50cm前後と大きいものである。おそらく、当地域では一般的に弥生時代後期～古墳時代前期に見られる梁行1間の掘立柱建物で高床倉庫と考えられる（松井1983）。B1号掘立柱建物、B5号掘立柱建物はいずれも桁行3間の建物で、B5号掘立柱建物は柱穴規模は小さなもので、おそらく平地式住居の可能性が高いだろう。B1号掘立柱建物は桁行8mを測る大形のものであるが、住間の標高差が1mもあるので建物として成立するものか検討を要するであろう。あるいは欄列的なものかも知れない。このように、掘立柱建物の検討をするとⅡ・Ⅲ期の集落は1住居群あたり1棟の高床倉庫を保有、管理をしていたことが判明した。なお、倉の保有率は竪穴住居約5棟あたり掘立柱建物1棟で計算すると保有率20%となるが、この値は例えば弥生時代の丘陵立地の遺跡の藤枝市稻ヶ谷遺跡が5%であることから比べると高い数値である。しかし、集落全体のなかでの倉の保有率が判った発掘調査例は少なくこの差が時代的なものか、集落ごとの差なのか結論を得るには今後の資料の蓄積に期待したい。

D地区については古墳時代前期の明確な遺構は少ないが、出土土器からはB地区とほぼ同時期の集落が存在していたと思われる。丘陵の半分がすでに大きく削平されていたので全体の集落構造は判らないが、住居1棟と方形周溝墓（D2号墳）が見つかったことから、居住域として利用されていたばかりでなく墓域として利用されていたことが判明した。丘陵規模からいって、B地区よりやや小さい規模の居住域と、BとD地区の集落の共通の墓域として利用されていた可能性が指摘できる。

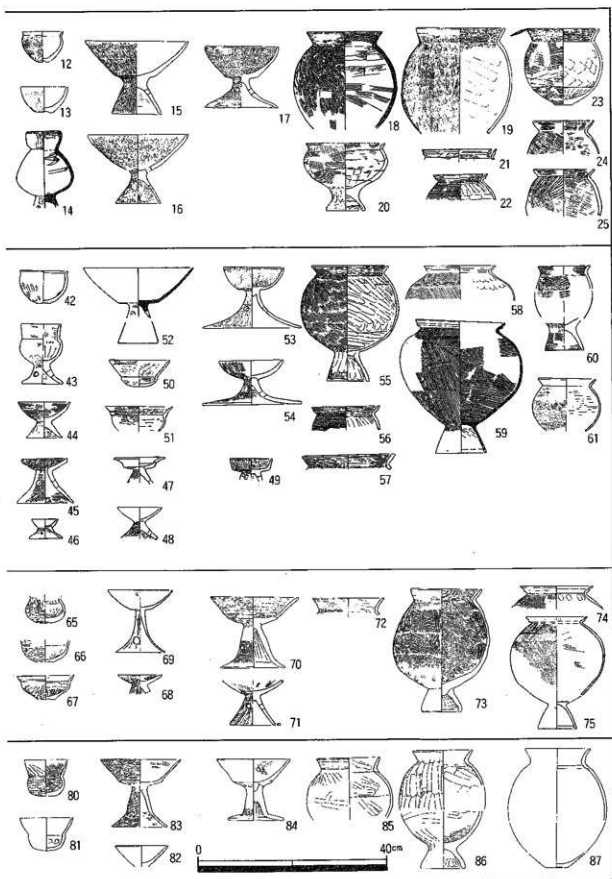
以上のように、若作遺跡の古墳時代前期の集落は2単位（B・D地区）の居住域からなる比較的小規模な集落で、存続時期は土器型式では2型式にわたるものの、すでに述べてきたとおり集落が安定するのは後半のⅡ・Ⅲ期である。また、弥生時代後期の集落とは別地点にあり、集落の断絶があったといっても良い状況である。こうした、弥生時代後期から古墳時代前期への集落の存続性の断絶が遠江ではどのような状況で展開したのかを見ることにより、若作遺跡の集落の歴史的な位置づけを試みてみたい。まず遠江の弥生時代後期から古墳時代前期の集落の継続、断絶を検討する前に、時期の検討と社会的状況を確認するうえで有効と思われる土器の変遷について、東遠江ではどのようなになっていたのかその概略を述べておきたい。

iv) 東遠江における古墳時代前期の土器の変遷

古墳時代前半に相当する土師器の変遷についてはかつてⅠ～Ⅳ期に時期設定をしたが（松井1985）、今回はそのうち若作遺跡に関係した時期のⅠ期～Ⅲ期について、近年の発掘調査例や今回の若作遺跡で得られた資料を含めて第48図にその変遷を示し再度検討を試みた。ただし図を見て判るとおりに、型式組列を組み立てるほど資料が揃ってきていないので、とりあえず変遷図として提示し見通しの指



第48図 東遼江の古墳時代前半期の土器変遷図



摘を示すに留めておきたい。

I期 壺型土器は弥生時代後期の菊川式段階に類似した在来系の1～8が主体的に存在する。形態は1、5、6、8に見るように菊川式同様胴部下半が屈曲しているものの、やや球胴化したものに変化してきている。7は菊川式の最末期の胴がよく張った形態のもので、弥生時代のものとは区別するのは難しいが女高遺跡4号住居跡の資料からI期に残存することが知られた。1、2は折り返し口縁の壺で後期後半の粗雑な作りのものに類似し、3は幅広の帯状になったもので菊川式のものとは異なる。4は内彎する単純口縁の壺で、菊川式のものとは比べると内彎度が少なくなり直線的に開く口縁になっている。これらに在来系のもののほかに畿内系の9の複合口縁の壺、東海西部域の10、11の広口壺など菊川式から系譜のたどれないものが見られるようになる。

高坏は菊川式特有の鐙状口縁のものではなく、東海西部域の欠山式の高坏から系譜を引く15、16と欠山式と畿内の小形高坏から生まれてきた17など東海西部域の系譜のものが見られる。

壺型土器は在来系の刻み目をもつものから、口縁部などで調整の刻み目をもたない18、19の台付壺がある。形態は菊川式のものに比べると長胴化している。口唇端部に面を作り在来系の系譜を引く19と欠山式の系譜を引く外反した口縁の18がある。台付壺には欠山式から系譜を引く21、22のS字状口縁壺と、23～24の畿内系の叩き壺がある。23はV様式系、24は庄内壺で搬入品の可能性がある。25は厚手で在地産のものであろう。

これら主要器種のほかに、菊川式より系譜のたどれない小形鉢がある。口縁が外反する12とそのままだけ13がある。そのほか口唇端部に面を作る台付瓢壺の14などが知られる。

I期の特徴は壺型土器に在来の系譜を引くものが見られるものの、高坏、小形鉢などの小形土器、台付壺(S字壺)など登場し大きな組成の変化が見られるようになる。また、外来系の土器は隣接地の東海西部系が主体で、叩き壺を中心として畿内系のものが少量見られる。並行関係は、高坏は欠山式直後のもの、S字壺は赤塚氏分類のB類段階のもの(赤塚1986)であることから尾張の宮腰編年元屋敷古段階(宮腰1987)、畿内の寺沢氏編年庄内1～3式(寺沢1986)に並行すると考えている。

II期古 在地系の壺型土器は折り返し口縁の26、27、受口状の複合口縁壺である28がある。28は口縁内側に折り返しのあるもので、明らかに古墳時代の段階のものでI期に遡る可能性もある。内側に折り返しのない受口状の複合口縁壺もI～II期古に存在するらしいが明確な資料はない。26、27の折り返し口縁壺は胴部が球胴化し1、2より系譜のある26のものと、3からの系譜のある27のものがある。外来系の壺は東海西部域系のパレス壺の30、古い型式の柳ヶ壺の36、畿内系の複合口縁の31～35が特徴的である。そのほか単純口縁の壺でも、東海西部域系の38の瓢壺、37の広口壺などがある。

高坏は東海西部域系の52、17より型式変化した53、畿内系の54などが特徴的である。

壺型土器は口縁が外反する55が主体となり、在地系の57は減少する。56は欠山式より系譜のある内彎する口縁の台付壺である。S字壺は、比較的東海西部域に類似した薄手の内面などで調整の58と、内面に刷毛目調整を残した厚手の在地系の59がある。叩き壺はV様式系模倣のもののほか60のような台付の叩き壺なども見られる。61は布留型壺で内面削り調整が施され搬入品の可能性がある。若作遺跡壺A類とした内面などで調整の壺(第10図12)は、形態は布留型で内面整形はS字壺の影響によるなど調整と理解される東海系のものもある。

このほか42のようなI期からある小形鉢のほか、45～49小形器台、50の小形埴、51の丸底の小形鉢などが少量であるが目立って登場してくる。

II期古は従来の東海西部系のもののほか、畿内系の複合口縁の壺、高坏にも54のような畿内系の高坏や小形埴、丸底の小形鉢、小形器台などが目立って登場し、畿内系の要素が強く流入してくるこ

が特徴的である。並行関係は、小形埴、丸底の小形鉢、小形器台の登場、S字甕は赤塚氏編年C類のなかでも古手のものと考えられることから、宮腰氏編年元屋敷中段階7、寺沢氏編年の布留1式に並行すると考えている。

Ⅱ期新 Ⅱ期古よりも新出の型式をもつものを抽出し、本期としたが確認しうる資料は少ない。壺型土器のうち62の柳ヶ壺は36に比べると新出の型式であり、63、64の長頸壺もⅡ期のものに比べると粗雑に型式変化している。

高坏はⅡ期古の52から変化するとと思われる71のほか、70の脚部の裾が大きく開くもの、69のような長脚のものなどが新しく見られる。

台付甕は72の外反する口縁のもののほか、73のような長胴で口縁の外反も少ない作りの粗雑なものが見られる。S字甕も口縁の作りの鋭さがなくなり肩の張りがなくなった74、75がある。

このほかⅡ期古よりも作りが粗雑で平底化している65、66の小型埴、67の小形鉢などがある。小型器台は68のような単純に外に広がるものがある。

Ⅱ期新はⅡ期古と組成の変化を読み取るほど資料は出揃っていないが、高坏などに新出の型式の変化が見られる以外はⅡ期古の組成のなかでの型式変化で捉えられそうである。並行関係はS字甕が赤塚氏編年C類のなかでも後出的なものであることなどから、宮腰氏編年元屋敷中段階8、寺沢氏編年布留2式あたりに並行させておきたい。

Ⅲ期 壺型土器はⅡ期のものとは全く異なり単純口縁の球形胴の78、79、長胴の77などが見られ組成の大きな変化が見られる。

高坏は83、84などの脚部の裾が大きく開くもののみになりⅡ期古の52の高坏系譜はなくなる。

台付甕は86のようなへらなで調整の粗雑な作りの長胴のもの、と85のような球形胴のものがある。このほか87のような長胴の平底甕が登場する。

小形土器としては、80、81の小形丸底埴が増加し、反対に小形器台は減少し82のようなやや深めの単純に開くものが知られるにすぎない。

Ⅲ期の並行関係は比較資料がないため不明な点が多いが、小形丸底埴の増加、高坏の形態から見ると畿内での寺沢氏編年布留3式あたりと考えておきたい。

以上のように古墳時代前半期の土器の流れのⅠ期～Ⅲ期までの概略を述べてきたが、まとめると以下のとおりとなる。

- (1) Ⅰ期は壺型土器に在地(菊川式よりの)の要素が強く認められるが、高坏、台付甕(S字甕を含む)などに東海西部域系の要素が強く認められる時期である。また、叩き甕に見られるように畿内的な要素(搬入品を含む)も少量であるが現れてきている。
- (2) Ⅱ期は壺型土器にも従来の東海西部域系のもののほか畿内系のものが目立始め、少量ではあるが小形器台、丸底小形鉢、小形埴なども組成のうえで確立する。
- (3) Ⅲ期は小形丸底埴の増加、長胴甕の登場、従来の壺型土器の大きな組成変化がありそうな段階である。

若作遺跡の集落変遷の時期設定のなかでのⅠ期は土器編年のⅠ期、Ⅱ・Ⅲ期は土器編年のⅡ期古にあたる。

v) 遠江における古墳時代前期の集落動向

東遠江では古墳時代前半期の土器はすでに述べてきたように、Ⅰ期では高坏やS字甕などを中心に東海西部域から強い影響を受け、さらにⅡ期になると畿内の影響が強く現れてくることが判った。こうした土器の変化が、はたして集落の動向とどのように関わってくるのか検討してみたい。

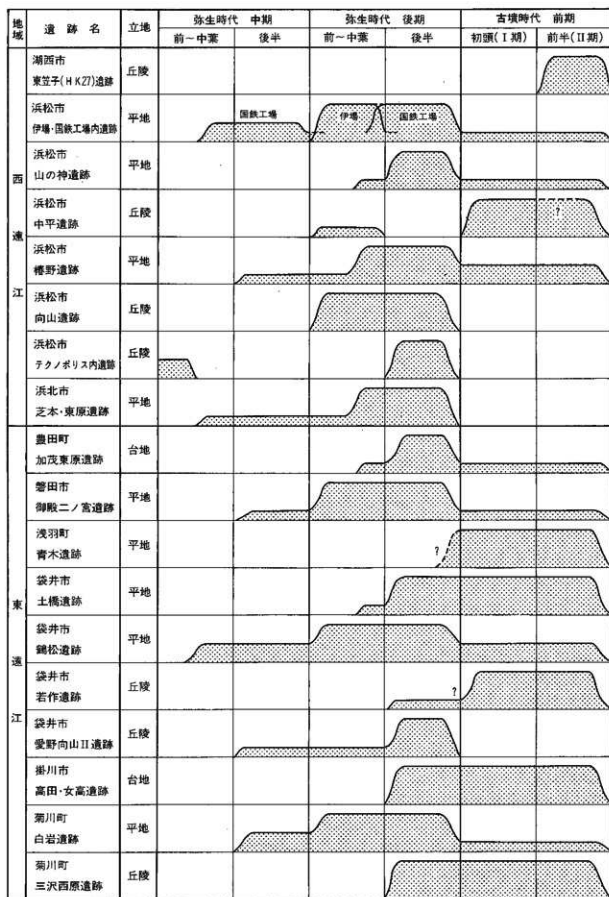
第49図に遠江のおもな弥生時代後期から古墳時代前期の集落動向の判る遺跡の盛衰図をまとめてみた。すると、集落の継続性にいくつかの傾向があることが判り、以下それを分類してみた。

- A-1 類 弥生時代後期後半に集落規模が拡大し、古墳時代前期では規模が縮小し少量の居住の痕跡しか確認できなくなる例。西遠江では浜松市伊場・国鉄工場内遺跡、山の神遺跡、東遠江では豊田町加茂東原遺跡、磐田市御殿二ノ宮遺跡、菊川町白岩遺跡などがある。
- A-2 類 弥生時代後期後半に集落規模が拡大し、古墳時代前期にやや集落規模が縮小する例。西遠江では浜松市椿野遺跡、東遠江では袋井市鶴松遺跡などがある。
- A-3 類 弥生時代後期後半に集落規模が拡大し、古墳時代前期にそのままの規模で集落が継続する例。西遠江は例がなく東遠江では袋井市土橋遺跡、掛川市女高・高田遺跡、菊川町三沢西原遺跡などがある。
- B 類 弥生時代後期後半に集落規模が拡大し古墳時代前期になると集落がなくなる例。西遠江では浜松市向山遺跡、都田テクノポリス内遺跡、浜北市芝本・東原遺跡、西遠江では袋井市愛野向山Ⅱ遺跡などがある。
- C 類 弥生時代後期後半には集落がなく、突如として古墳時代前期に集落が成立する例。湖西市東笠子（HK27地点）、浜松市中平遺跡、東遠江では浅羽町青木遺跡がある。なお、若作遺跡は、後期後半の小規模集落があるが地点が異なるため、B、D地区の古墳時代前期の集落は本類に含めて考えたい。

以上の分類から以下の傾向が読み取れた。

- (1) たとえば浜松市伊場・国鉄工場内遺跡など平地に立地する歴代の拠点的な集落の場合、おおむねA-1類集落か、あるいは袋井市鶴松遺跡のようにA-2類集落となり、古墳時代前期になると大きな変化を受けたと考えられる集落である。ただし、A-1類とA-2類の集落では変化の割合が異なっていたと考えるべきであろう。
- (2) 後期中頃～後半に成立し集落規模を拡大した集落の中では、A-1類集落になる浜松市山の神遺跡と、A-3類集落になる掛川市高田・女高遺跡、袋井市土橋遺跡などがある。A-3類集落は東遠江に多そうである。
- (3) B類集落は今のところ西遠江の丘陵性遺跡に多そうである。
- (4) C類集落の発見例は少ないが、西遠江に多そうな傾向がある。

このような傾向から推定すると、西遠江にくらべて東遠江のほうが弥生時代後期～古墳時代前期にかけて集落の継続性がある場合が認められる。若作遺跡や青木遺跡と御殿二ノ宮遺跡、愛野向山Ⅱ遺跡に見るように明確に集落の断絶、再編成が見られる集落もあり情勢を複雑化させている。ただし、東遠江の場合歴代の拠点集落は程度の差はあるものの集落の再編の影響は受けており、継続性の高いA-3類集落は歴代の拠点集落には認められない。また、おもに西遠江の場合丘陵性遺跡は、B類ないしC類集落を形成し大きな政治的影響を受けていることが判る。若作遺跡も古墳時代前期に受けた大きな政治的な動きに呼応して出現した集落であろう。その胎動はまさに本報告土器編年Ⅰ期（S字壺B類段階）に起こり、遠江を席卷し集落の再編成を促していったことだろう。その動きは土器の変化で見ると、まずⅠ期の段階では尾張地方から訪れ、次にⅡ期の段階に畿内の影響を考えざるを得ない状況である。この状況はすでに赤塚氏が指摘しているとおり尾張でもⅠ期の元屋敷式の閉鎖性、Ⅱ期（S字壺C類段階）の畿内の影響の拡大となって現れてきており（赤塚1987）、この状況が東海地方東部を中心とする弥生時代後期～古墳時代前期の集落となってきたと推定される。



第49図 遠江地方における弥生・古墳時代前期の集落盛衰変遷図

第2節 若作古墳群

i) 古墳群の特徴

若作古墳群における墳丘・外部施設・主体部・副葬品・形成時期・分布・群構成等の特徴を整理すれば次のとおりである。

墳丘・外部施設

- ① 墳丘形態は胴張方形・楕円形・円形とバラエティーに富むが、同形態の古墳が明瞭・定形的な平面形を呈している訳ではない。胴張方形の古墳に6世紀代まで降るものは認められないようであるが、形態上の時期的な変遷や文群単位の規則性は見い出せない。
- ② 墳丘規模は1辺・径6～9mが主体をなし、9m以上の古墳が4基（B2・9 D2 E1号墳）、5m以下の著しい小古墳が2基（B6 C4号墳）ある。総じて小規模であり、ばらつきがめだつ。こうした規模のばらつきは、地形を大きく変更することなく、立地する尾根の大きさに左右されたためと判断でき、小古墳であるということ以外、画一的な規制は加えられなかったようである。定形的でない墳丘形態もこうした自然地形に制約されたものと考えられる。
- ③ B7・8 C7号墳のように盛土のみにより墳丘を築いている古墳も認められるが、基本的な構築技法は丘陵斜面を基盤層まで削り込み、尾根側に溝を掘って墳丘を区画するというものである。この削り込み、溝からの排土を盛土に用いている。B8 E1号墳では一旦旧地表面、基盤層を階段状ないしは平坦に整形した後盛土を行っていた。墳丘面に葺石等外部施設は何ら築かれていない。
- ④ B9 C5号墳では墳丘下位の斜面にさらに一段削り込みが認められ、一見二段築成のように見える。この下段の削り込みまでを墳丘とすれば、一辺・径11m以上の古墳ということになる。B2・4号墳では尾根上の溝と削り込みがつながらず、墳丘隅に土橋状の突出部を有していた。

主体部

- ① 掘り方の形態は平面長方形、平坦な底面を持ち、箱式木棺を直葬するのが一般的な埋葬法である。他に船形を呈するものが4基（B7 C2・5・7）ある。割竹型木棺を納めていたと推定されるB6・7 C4号墳の新しい主体部は5世紀後半から6世紀前半の構築と考えられ、群形成開始期の古墳には見られない。礎を並べた棺台はこの割竹型木棺を固定するための施設と考えている。B4・6・7・8・9 C4号墳には小口板を押えていたと思われる礎・白色粘土塊が認められ、C1・6号墳は礎床を、C5号墳には粘土櫓が築かれていた。
- ② B2 C1・4・7 E1号墳は2基の主体部を有している。掘り方の幅は1m前後とはほぼ一定しているが、長さには顕著な長短差（1.15～3.75m）が見られる。船形の掘り方は2.55m以上と総して長大である。B3・7 E1号墳等例外も認められるが、主軸方位は尾根に平行するものと直交するものに2大別でき、群形成開始期および築造時期が異なる古墳（C5 D2号墳等）は前者を示す傾向にある。
- ③ B7・8 C1号墳は明らかに墳丘を構築した後主体部掘り方を掘り込んでいく。一方B1 D2号墳では掘り方の輪郭が基盤層上面にいたるまで明確にならず、その掘り込みも浅い。棺を据えた後に墳丘を築いたものか、また古墳築造当初から土のう積み等何らかの方法で木棺を納める空間を確保していたとも考えられる。

副葬品等遺物

- ① 副葬品を有する古墳は7基のみで、何ら副葬しないのが一般的である。群形成開始期に位置づけられるB9 C5 D2号墳から少量の玉（滑石製管玉2点 ガラス小玉2点 ガラス小玉3点

第2表 若作古墳群一覽表

(単位 m)

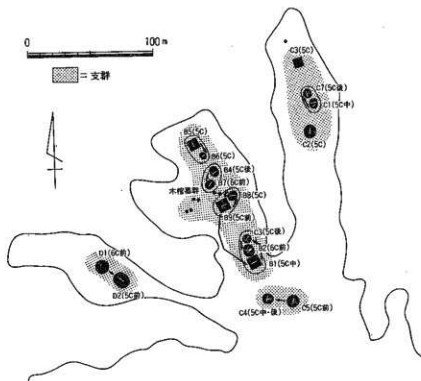
古墳名	墳形	墳丘位置 (東西×南北)	埋葬施設	埋葬施設 法	埋葬施設 方	副葬品	墳丘・周溝等出土品	築造時期	備考
B-1	圓強方形	7.4×8.4	木棺直葬(長方形)	0.75×1.35	尾根直交		須置器高杯(墳頂)	5 C 中	
2	橢圓形	8.0×10.6	木棺直葬(長方形)	0.9×1.95 0.6×2.0	尾根直交 斜行		土師器高杯・壺(周溝)	6 C 前	磨光台
3	円形	6.5	木棺直葬(長方形)	1.05×2.3	尾根斜行		鉄線1 須置器蓋 土師器高杯(周溝)	5 C 後	
4	橢圓形	6.3×6.5	木棺直葬(長方形)	1.1×2.25	尾根直交		鉄線1(蓋土) 須置器蓋(墳頂・墳丘)	5 C 後	
5	圓強方形	6.5×7.8	木棺直葬(橢圓長方形)	0.9×2.4	尾根平行			5 C	
6	圓強方形	(4.5)×4.4	木棺直葬(橢圓長方形)	0.85×(2.45)	尾根直交			5 C	割竹型木棺 小口粘土・磨 磨光台
7	橢圓形	8.0×6.3	木棺直葬(船形)	0.6×2.55	斜行平行	鉄線1	須置器杯蓋(周溝)	6 C 前	割竹型木棺 小口粘土・磨 磨光台
8	橢圓形	—×6.7	木棺直葬(長方形)	1.15×(1.95)	斜行直交		土師器蓋(墳丘)	5 C	墳丘下整形面
9	圓強方形	—×(9.2)	木棺直葬(長方形)	1.05×2.15	尾根直交	刀子1 滑石製管玉2 ガラス小玉4		5 C 前	主杯等2カ? 小口粘土・磨 赤色顔料
C-1	橢圓形	6.0×7.5	木棺直葬(長方形)	1.0×1.65 0.7×1.15	尾根直交 斜行	硬玉製管玉9・ガラス小玉83	須置器蓋・壺(墳丘・周溝)	5 C 中	礎床
2	橢圓形	(8.9)×—	木棺直葬(船形)	0.85×3.75	尾根平行			5 C	
3	圓強方形	—×6.5	—	—	尾根直交	鉄線1・大刀1	鉄線2 滑石製紡輪串1(周溝)	5 C	
4	橢圓形	7.5×5.0	木棺直葬(橢圓長方形)	(1.7)×0.75 (2.4)×0.8	尾根斜行 直交			5 C 中・後	割竹型木棺 小口粘土・磨 磨光台
5	円形	8.8×8.7	木棺直葬(船形)	1.1×2.65	尾根平行	ガラス小玉3		5 C 前	粘土磨
6	—	—	木棺直葬(長方形)	0.75×(1.7)	尾根直交			—	
7	橢圓形	(6.8)×6.1	木棺直葬(船形) (橢圓長方形)	0.7×3.4 0.8×1.65	尾根平行		須置器蓋(周溝)	5 C 後	
D-1	—	—	—	—	—		刀子1 須置器杯蓋・杯蓋・短頸壺・特殊器形・肥土状 土師器高杯・杯蓋・壺(周溝2品一併)	6 C 前	
2	橢圓形	13.1×10.6	木棺直葬(長方形)	0.95×1.96	尾根平行	鉄線2 滑石製白玉8	土師器高杯(墳丘)	5 C 前	
E-1	圓強方形	10.8×11.6	木棺直葬(長方形)	0.95×1.5 0.8×1.65	尾根直交			—	墳丘下整形面 柱穴

滑石製白玉8点)と武器(刀子1点 鉄鍔1点)が出土しているが、C5・D2号墳における玉の出土状態は掘り方底面からかなり浮いており、被葬者が身につけていた装飾品というより、棺の蓋上に置かれていた、ないしは棺上で行われた何らかの葬送行為に係わる遺物と見たほうが妥当なように思われる。5世紀中葉・後半(C1 B4号墳)になると玉の副葬量は増加し(硬玉製管玉9点 ガラス小玉83点 硬玉製管玉8点 ガラス小玉6点)、明らかに棺内遺物である。C3号墳では武器(大刀1点 鉄鍔数点 刀子1点)と滑石製紡錘車1点が共伴していたらしく、6世紀前半に属するB7号墳から工具(鈍1点)が出土している。群形成の全期間を通じ土器は一切副葬されない。

- ② 墳丘・周溝内等に土器が伴っていた古墳は10基ある。D2号墳の周溝内に5世紀前半まで遡ると思われる土師器高杯脚が落ち込んでいたが、土器の出土が盛んになるのは須恵器の出現以降、5世紀中葉にいたってからである。その器種組成を古墳の築造時期に従って見てみると、5世紀中葉=B1号墳(須恵器無蓋高杯・墳頂) C1号墳(須恵器甕・墳丘・周溝 同甕・周溝)、5世紀後葉=B3号墳(須恵器甕・土師器高杯・周溝) B4号墳(須恵器甕・墳丘・周溝) B8号墳(土師器壺・墳丘) 6世紀前半=B7号墳(須恵器杯蓋・周溝) D1号墳(須恵器杯蓋・杯身・短頸壺・特殊器形・土師器杯身・高杯・壺・周溝一括)となる。5世紀代の器種は1ないし数個体の高杯・甕・壺等に限定され、杯身・杯蓋の伴出は6世紀前半まで降るようである。B1号墳の須恵器無蓋高杯が細片化し墳頂部付近に散らしていたように、5世紀代の土器の多くは破片となり出土する。土器は葬送儀礼に伴って人為的に破砕され、墳丘面に遺棄された可能性が高い。一方D1号墳の周溝から一括出土した土器群は、破片とはいえず器形を残しており、その量の多さ、須恵器杯身・杯蓋が主体となる点で5世紀代と大きく違っている。

形成時期・分布・群構成

- ① A～E地区の各丘陵がまとまる主尾根上にも小古墳が点在しており、C6号墳はこの主尾根の古墳群に属するものと思われる。E1号墳を除きA・E地区に古墳は認められず、深く入り込む支谷に挟まれて、北に向かって扇状に開く3条の尾根筋が、ある集団の奥津城として意識されていた可能性が高い。C6・E1号墳を除く17基は尾根を単位に大きく4つの支群に区分される。
- ② 出土遺物 木棺形態 掘り方方位、その位置関係から推定した古墳群の形成過程は次のとおりである。群形成の開始期は5世紀前半と考えられ、B9 C5 D2号墳がほぼ同時期に築造されている。5世紀中葉にB1 C1・4号墳が築かれ、5世紀後葉にいたりB2・4・5・8 C4(新主体部)・7号墳が加わる。6世紀前半代の新造墳はB2・7 D1号墳である。C2号墳の築造時期を示す遺物は無いが、主体部方位が尾根に平行している点は古くなる要素であり、またC3号墳も5世紀代に属する古墳と思われる。こうして見ると、群構成の核となる古墳は複数あり、そこに優劣は存しない。5世紀後半に古墳の築造数は増加し、6世紀代になると一転減少している。6世紀中葉以降古墳は築かれなくなる。
- ③ B8号墳はB9号墳を、同じくB7号墳はB4号墳を、B6 C7号墳はそれぞれB5 C1号墳を避けて、丘陵斜面や尾根の鞍部に近接し築かれており、両古墳は密接不可分の関係にあったと推定できる。B1・2・3号墳の3基も周溝のみを重複させながらきれいに並んでおり、同様の関係を推定させる。こうした単位群はB地区丘陵において顕著に認められ、古墳の築造数が増加する5世紀後葉になって形成され始めるようである。
- ④ B地区には木棺墓群が分布している。大きく3区分され、基本的に古墳群と重複しない。E1号墳の周辺からも土溝状の堅穴が検出されている。多くがその形態から見て箱式木棺を納めていたと



第50図 若作古墳群構成模式図

ーに竄む。木棺直葬を主体部とする点は共通しているが、掘り方には長方形と船形とがあり、木棺にも箱型と割竹型の違いが見られる。掘り方の構築方法や木棺の埋納工程にも差が認められるようであり、各古墳はその墳形・主体部構造・構築方法について独自の選択を行っている。各古墳の被葬者は古墳の築造に際し、ある程度の自立制・固有制を発揮しうう立場にあった者と推定される。

群形成開始期の古墳から出土したガラス小玉・滑石製白玉が棺上で行われた葬送行為に係わる遺物であるとすれば、この時期の副葬品は刀子・鉄鏃等数点の武器に限られていたことになる。5世紀中葉以降、玉類の副葬は増加し、工具(鍬)が加わる。むしろ何ら副葬されないのが一般的であり、その量・質共あまりにも貧弱ではあるが、これら副葬品の組成には、同時期に並行して築かれていた中期大形古墳の多量な鉄製武器類の副葬、滑石製模造品の副葬化等の現象が反映していたものと思われる。また被葬者の死後の飲食を想定した土器類が一切副葬されていないのも、横穴式石室を主体とする後期後半の群集墳との大きな相違である。古墳を築造した人々が意識していた死後の世界は「黄泉国」ではなく、遥かなる海の向こうにある「常世」であったことを物語っている。

半数の古墳に高杯・甕・壺等が伴っていたが、土器類の多くは人為的に破壊されており、ただ単に被葬者に食物を供えていたものとは考えられない。その出土状態・量・器種組成から見て、これらの土器類は葬送儀礼に用いられた食器と判断でき、被葬者と参列者の代表が共飲・共食し、儀礼の最後に土器類を破砕して、墳頂・墳丘に遺棄していく姿を想像するのも、あながち荒唐無稽な空想とは思われない。こうした死者との共飲・共食は祖霊と化した被葬者の霊威を受け継ぐために欠くことのできない儀式であったと考えられる。前述したように各古墳の被葬者はある程度独自制を有していたと推定でき、また主体部が死者を密閉する従来からの構造を踏襲していること、鍬は出土していないものの副葬品に前・中期大形古墳と共通する基本的な要素・傾向が認められることを考慮すれば、この被葬者の霊威とは、前方後円墳の出現とともに創出されたいわゆる「首長霊」と見ることも可能

推定でき、B3・4・6・8号木棺において両小口側に白色粘土塊や礫を並べた棺合が認められるように、構造・規模は古墳の主体部と何ら変わる場所がない。B1・2号木棺がB8号墳の周溝により壊されていたこと、またB8号木棺出土の硬玉製管玉がB9号墳と同様に側穿孔と判断されることから、これらの木棺墓群は古墳群の比較的遡る時期に並行して築かれたものと考えている。

ii) 被葬者の性格

立地する自然地形に左右され墳形はバラエティ

ように思われる。若作古墳群の被葬者は決して家父長などではなく、首長の概念に属する存在であったと推定している。その規模は比べものにならないものの、古墳の築造は大形前方後円墳と同様、祖霊となった亡き首長と共飲・共食し、後継首長がその霊力を引き継ぐ場・祭祀であったのである。船形を呈する掘り方が認められたように、被葬者がいく死後の世界は依然として原初的な「常世」として強く意識されていた。「常世送り」と「黄泉戸喫」は確かに矛盾する観念ではあるが、こうした矛盾する観念が共存している点に、「首長墓の群集墳」とも言いえる若作古墳群の被葬者の性格が如実に示されているように思う。

後期後半の群集墳に比べ総基数が少なく分布が散在的である点も被葬者が首長であったことを補完している。若作古墳群は祖霊を同じくする4つの同族集団の首長層の奥津城と考えられるが、その内にすべての集団を包括し、群形成の祖となる大形古墳が含まれている訳ではない。一基単独で先行する古墳は無く、3つの支群においてはほぼ同時期に古墳の築造が始まっている。この群形成開始期の古墳は二段築成様を呈し、わずかな違いを見せてはいるが、主体部構造・副葬品に顕著な差は認められず、それぞれが個性を有している。4つの同族集団の関係は若作古墳群を支配・統括する上位の首長に対し対等であったと思われる。

5世紀後半になって若作古墳群に変化が見え始める。変化とは密接不可分の関係にある単位群の成立と、それに伴う古墳築造数の増加である。単位群は特定の支群に片寄って現われ、結果として4つの支群に規模の大小差を生んでいる。一転して6世紀前半には新造古墳は激減し、墳丘・周溝等から須恵器環頸を主体とする多量の土器群が出土するようになる。こうした変化は、首長層が拡散し、首長霊の鎮魂・継承の場であった古墳の意義が動揺し始めている当時の社会状況を反映したものであろうが、その具体的内容は私にはよくわからない。ただ若作古墳群の終焉する6世紀前半は、中濃地方において大形前方後円墳が築かれなくなる時期であり、一方横穴式石室を持ち鉄地金銅張りの馬具を副葬していた大門大塚古墳や金銅装飾大刀が出土した字洞ヶ谷横穴の出現期とほぼ一致している。こうした在地的でない権威が混沌としていた社会・政治状況を再編し、後期後半の密集型群集墳に通じる新しい集団関係・社会構造を創り上げていったものと考えている。

こうした若作古墳群に対する解釈に論理の飛躍や不明瞭な点が多々含まれていることを私も自覚している。思いつきの感是否めないが、若作古墳群を通していわゆる初期群集墳が私達に投げかけている課題の端緒だけでも何とか掴まえてみたいと思ったのである。

参 考 文 献

- 都 出 比 呂 志 1974 「古墳出現前夜の集団関係—淀川水系を中心に—」『考古学研究』第20巻第4号
- 森 岡 秀 人 1985 「山・丘の弥生ムラと屋外火焚場」『考古学論集』第1集
- 松 井 一 明 1988 「静岡県における围郭集落と高地性集落について」『マージナル』No. 8
- 松 井 一 明 1983 「弥生時代から古墳時代前期の掘立柱建物について」『大門遺跡』袋井市教育委員会
- 松 井 一 明 1985 「東中遠地域における第Ⅰ期、第Ⅱ期の土器の編年の位置づけ」『坂尻遺跡—古墳時代編一』袋井市教育委員会
- 赤 塚 次 郎 1986 「『S字甕』覚書 '85」『愛知県埋蔵文化財センター年報昭和60年度』
- 赤 塚 次 郎 1987 「逍遙する土器」『第3回東海埋蔵文化財研究会欠山式とその前後研究・報告編』
- 寺 沢 薫 1986 「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡』榎原考古学研究所
- 宮 腰 健 司 1987 「尾張における「欠山式土器」とその前後」『第3回東海埋蔵文化財研究会欠山式とその前後研究・報告編』
- 静岡県教育委員会 1979 『静岡県遺跡地図・遺跡地名表』
- 川 江 秀 孝 1979 「静岡県下の須恵器について」『静岡県考古学会シンポジウム2』 静岡県考古学会
- 第48図の土器引用文献は若作遺跡のもの以外は以下のとおりである。
- 磐田市教育委員会 1982 『新豊院山墳墓群』
- 袋井市教育委員会 1985 『土橋遺跡—基礎資料編一』
- 袋井市教育委員会 1985 『坂尻遺跡—古墳時代編一』
- 掛川市教育委員会 1983 『行人塚遺跡発掘調査概報』
- 掛川市教育委員会 1988 『高田遺跡発掘調査概報』
- 浅羽町教育委員会 1984 『青木 馬場第1・第2遺跡』
- 菊川町教育委員会 1985 『三沢西原遺跡』

本発掘調査を実施するにあたり、上石野自治会長さんをはじめ地元のみなさま、清水建設株式会社 新村英彦課長 広瀬英男所長 角皆よし枝さんにはひとかたならぬお世話になった。ともすれば中断しがちな調査工程のなかで、円滑に現地作業を遂行できたのは、樹木の伐採等を計画的・迅速に進めていただいた広瀬所長さん方の努力のおかげと言っても過言ではない。文末ではありますがここに記して深く感謝の意を表します。

若作遺跡 若作古墳群

—三甲株式会社東海工場新設事業
日星電気株式会社袋井工場新設事業
に伴う緊急発掘調査報告書—

1990年 3月 30日

発 行 静岡県袋井市教育委員会
〒437 袋井市新屋一丁目1番地の1

印 刷 株式会社 開 明 堂
〒430 浜松市中沢町1-1

写真図版



若作遺跡・古墳群遠景（北から）



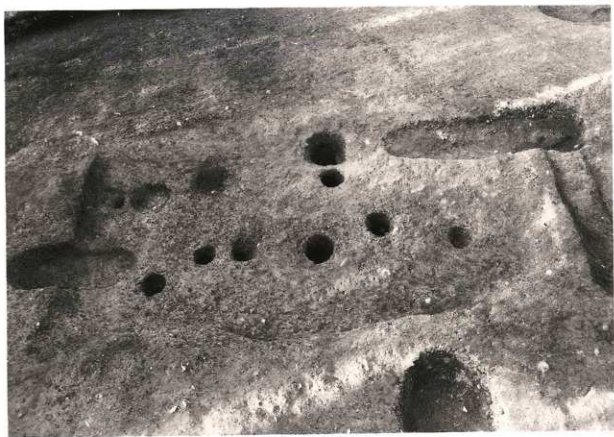
若作遺跡・古墳群B地区遠景（北から）



B地区遺構群（東から）



B1号住居（南から）



B4号住居（南から）



B4号住居鉄剣・鉄斧・鈍出土状況（北西から）



B 8 号住居（北から）



B 9 号住居（北から）



E1号住居（北から）



C地区土塚群（南から）



D地区土器棺墓出土状況（北から）



B1・2・3号墳分布状況（北から）



B 1 号墳（北から）



B 2 号墳（北から）



B 3号墳（北から）



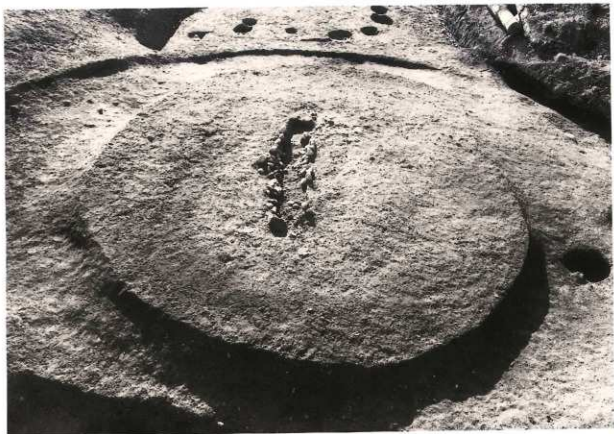
B 4号墳（南から）



B 5 号墳 (南から)



B 6 号墳 (南から)



B 7 号墳（東から）



B 7 号墳主体部（東から）



B 8 号墳（北西から）



B 9 号墳（西から）



C 1号墳 (北から)



C 2号墳 (北から)



C 3 号墳（北から）



C 4 号墳（南から）



C 5 号墳（東から）



C 7 号墳（北から）



D 1 号墳（南東から）



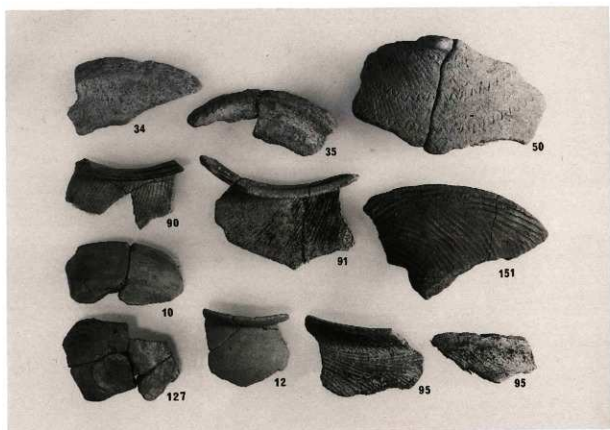
D 1 号墳周溝内土器出土状況（南西から）



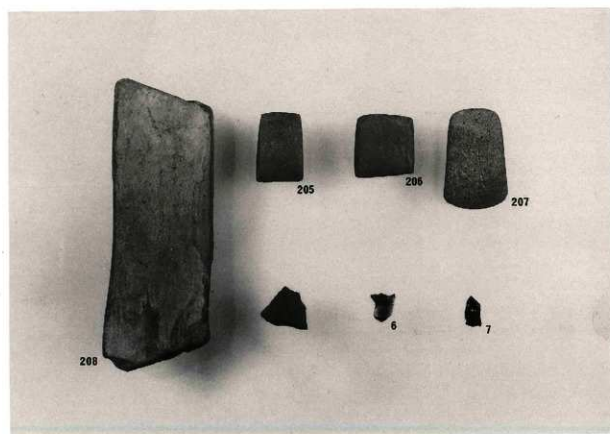
D 2 号墳（南東から）



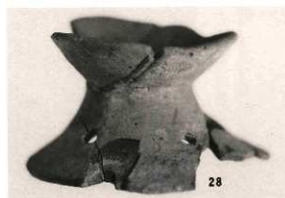
E 1 号墳（南から）



遺物 (1)



遺物 (2)





遺物 (4)

